

香葉

記念号



1991

NO. 20

目 次

講演会への御案内	1
会長あいさつ	2
元学長あいさつ	3
前学長あいさつ	6
学長あいさつ	9
記念号発刊を祝して	11
女専のページ	12
短大の歴史(年表)	16
思い出の写真集	18
海外からのお便り	20
吉武輝子先生講演会	24
英文II部の方々	26
合同同窓会	28
「公開講座」へのおさそい	29
著書紹介	30
千葉義孝先生追悼	32
クラス会報告	34
県央のつどい	39
短大インデックス	40
母校ニュース	41
賛助金	42
決算・予算	43
編集後記	44

表紙	関 頼 武
カット	成 川 勝 子 浜 本 愛 美



アムステルダム運河を吹き抜ける爽やかな榆の木の
風の音を是非聞きにいらして下さい。

「吉屋 敬先生 講演会」

満開の果樹のしたを私は日に何度もいったりきたりして、じっと青い空に溶けいりそうな白い花を眺めていると、今ここでこうしていることが、まるで夢のように思われてくるのだった。21年前の晩夏、私は1年の予定で留学を志して、小雨降るスキポール空港に降りたった。初めの3年間ぐらい見続けた日本に帰る夢も、もう見なくなって久しい。そしてふと気がついた時20年以上の歳月が夢のように過ぎていた…「榆の木の下で オランダで想うこと」先生の著書から抜粋。

オランダ在住25年の女流画家・エッセイスト。オランダ・日本両国でご活躍中の吉屋敬先生が湖水のほとりレーウヴェイク村からいらしゃいます。きっと面白いお話がきけるでしょう。ご期待下さい。



テーマ：「アルカディアの夢」

日 時：1991年11月4日(月)

午後1時30分～

場 所：図書館棟5F 視聴覚教室

▽講師の紹介▽

1945年 横浜市に生まれる。

1965—66年 オランダ ハーグ市、王立美術大学及びフリーアカデミー・オブ・ファイン・アーツでリトグラフとテンペラ画を専攻。

1973年 ハーグ市ファイリーポーナ画廊でユ

リアナ女王戴冠25周年記念特別肖像画展に日本人としてただ1人招待作品出展。

1974—89年 この間オランダ、日本で個展20回以上、1985年から銀座・フジキ画廊にて「イヴの記憶シリーズ」渋谷・西武百貨店画廊で「ネーデルランド・風」他を発表。1989年佐倉市民音楽ホール展示室にて「吉屋 敬 の夢現世界—オランダ20年の軌跡」を開催（佐倉市政35周年記念、日蘭修好380周年記念事業）

1990年 著書「榆の木の下で—オランダで想う事」（未来社）その他新聞・雑誌等掲載エッセイ・挿絵等多数

★香葉会の部屋★ご案内

卒業生と在校生、教職員の交流の場として、又卒業生の部屋として3号館101号室にて、コーヒーとお菓子のサービスをいたします。お友達同志お誘い合わせの上お立ち寄り下さい。

「香葉」記念号発刊によせて

会長 古城 房子



今年は「香葉」を発行して二十回目を迎え、記念号として皆様にお届けできることは、香葉会創立当初から、関わってきた一人として感無量のものがございます。三千余名の卒業生を抱えて、一九七〇年に、大学同窓会燦業会

短大支部から独立、香葉会として独自の同窓会活動の第一歩を踏み出しましたが、当時の、まことに乏しい予算の中で、年一回の卒業生対象の総会開催、会誌の発行、名簿の出版まで、何とかこぎつけた苦勞を思い返しますと、学校当局のご援助と、卒業生諸姉のご協力があつたればこそと感謝に堪えません。会誌は、卒業生の唯一の情報交換の場であり学内ニュース提供の場でもありますから、年一回は必ずお届けしたいと思えました。ああでもない、こうでもないといと試行錯誤の末、でき上がった創刊号を手にした時の喜びは、ひとしおでした。資金不足の為、一年おきの隔年の発行を余儀なくする苦しい決断を迫られ、代りにタブロイド判の通信をお送りした年が一九七六年と七八年の二度ありました。幸い七九年からは休刊することなく毎年、発行することが出来るようになりましたが、これも毎年、何ヶ月もかけて奉仕して下さる編集委員の方達、快く執筆に協力して下さいる先生方、お便りを下さる卒業生の皆様方に、はげまされ、助けられてきたお蔭です。スタイルは練りに練った創刊号を大体、踏襲してきて内容は毎年、変化をつけるように努力してお

りますが、まだまだ満足するものでなく、ご批判も多いと思います。郵送料が高くなりましたので頁数の制限もあり、新しい企画を盛り込むのも、むずかしい点もありますがマンネリ化しないように、心がけていきたいと思えます。二十号という成人式を迎えましたので今後の成長を期待して戴き、皆様方の唯一の交流の場として活用して戴きたいと思っております。ご自由な投稿をお待ちしております。企画に対するアイディアの提供、編集への参加も大いに歓迎いたします。毎年、こつこつと手さぐりで歩んできて、いつの間にか二十年たってしまったというのが実感ですがこれで良いのかという反省を、いつも抱いてきました。こゝまで歩みを共にして下さった方々のご苦勞を心から感謝し、これから益々充実した読みごたえのある会誌に、皆様とご一緒に育てていきたいと願っております。

(短英二)



敗戦廃墟の灰からのフェニックス わが短大の誕生

元学長 相川 高 秋



長い戦争と敗戦の結果、焼野原となったこの横浜の地に、灰の中から不死鳥が飛び立つ様に、わが短大（当時「女専」）の設立認可が文部省から下りたのは、敗戦の翌年一九

四六年四月十五日であった。（従って入学試験は、五月に入つての二十四日、二十五日、入学許可者は、英語科七十七名、家政科六十名である。）

敗戦の混乱、校舎の焼失崩壊、文部省を含めた日本政府の喪心自失等に関する詳細なる記録、又それ等をくぐつての、女専設置申請の私と遠藤書記の血みどろの経験談は拙著「わが恵み汝に足れり」（ヨルダン社）に書かれているので、是非読んで頂きたい。

ここでは、短大（当時は女専）創設当時の我々の理想、夢を、空爆に依り一面の灰となった横浜を背景に、語ってみようと思う。

それ迄は、男子のみの学校であった関東学院で、始めて女子高等

教育に着手しようとした私の脳裡に、アリストファネスの「女の議會」があった事は、今迄に何度か述べた。それ迄の軍国主義日本の男中心思想に反発してギリシャの物語の様に、女性が我が国政治の重要な要素を占める様になったら、きっと平和が来るのではないかというのが私の発想の一つであった。尤も当時の坂田院長の良妻賢母主義が、別の意味で、この女子高等教育機関設置に強力な支持になった事を私は否定するものではない。併しこの新しい女専の構想、実施は凡て私一人に任されていて、かつて一度も、その根本方針に関して、不当な干渉がなかった事を、坂田院長の人間の大きさとして、今でも深い尊敬と感謝の念を持っている者である。

当時の私の女性像が、その後四〇年近く経って、やうやく政党中央主脳、国務大臣等々の中に、実現される様になった事は、誠に喜ばしい事柄である。その内に、サッチャー女史の様な、有力な女性総理が我が国に生れる事も、そう遠い未来ではないと思つている。

さて当時の私の女子高等教育のシナリオは今日の様な、巨大な機構ではなかった事を先ず申しておき度い。勿論今日の大学経営の在り方から考えて、巨大化はその存続と繁栄の不可欠の条件である事は私も知つている。併し内村鑑三や新渡戸稲造を生み出した小さな札幌農学校、いや私自身を暖かく迎えて、基督教の社会的使命を教えてくれた在籍わづか五〇名のクローザー神学校（そこからは、かのマルチン・ルーサー・キングが、私の二年前の卒業生として出ている。）更に卒業生の一人一人の名前迄憶えている在籍三〇〇名の旧高商部等を考えると止むをえないとしても、必要悪としての多量生産の巨大大学校制度に多少の疑いを抱かざるをえないのである。

現に今日に到る迄、友情を続け、時々逢つては時局を論じ、又学

術新刊書に関し語り合ったりしている卒業生達は、凡て旧高商部、女専時代の小型教育の人々であって、大型になった大学、短大時代の卒業生は殆んど忘却の彼方に消え去って了った様に感じられてならない。

短大の前身女専時代の学生は、自由に学長室にも出入りし、学校の行事も、教師、学生の合同協議会で話し合つて決めたものである。時には、学長不信任案に近い抗議文を持って学長室にどやどやと女子学生の一団が押しかけて来た事もあった。その者達の中に私に極めて親しい間柄の者がいて、私はその者に向つて、「ブルータスよ、おんみ迄もか」とシェイクスピアの言葉を浴びせかけた時、その女性が最近になって私に話してくれた事があったが、私は勿論憶えていないので苦笑するばかりであった。

とにかく、当時の学生教師間の付き合いはそんなものであり、私はなつかしくその頃を思い出すのである。

学生と教師との関係は、卒業後もそのままであらねばならぬと思つて思っている。それ故に今でも、例えばこの一月湾岸戦争が起つた時等は、それに関して、「地上戦は何時頃始まるのでしょうか」とか又、「キリスト教とイスラムとは、どこが違うのでしょうか」等という様な質問を電話でして来る者が幾人かいた。そうした問題に対して私は充分なる答えが何時でも出来る様に、常に勉強している積りである。週毎に読む新刊が二冊を下つた事は絶無といえる自信を八十五才になつた今でも常に持っていると思う。

その他、当時の女専に関し私が誇りに思う一つの事は、毎日曜午後の婦人教養講座であった。恐らく之は今日流行のそののハシリの一つであつたと思うが、毎日曜の午后、わが校の小講堂は、教養に

飢えた近所の主婦達で一杯であつた。高い会費を払つて集つた彼女等の数は、毎回百名を越えていた。私は私の大学時代の恩師本多顯彰氏の援助を得て、当時の思想界の第一人者、米川正夫、谷川徹三等の書斎迄、出かけて行つて交渉したものである。勿論私を始め、わが女専の教授達が各々その専門の分野について講座をもつてくれた。どの位この講座が続いたか今ではハッキリ記憶していないが、軍事一色に塗りつぶされ、空襲の夜々に怯えていた彼女等にとつて、それは將に黄金の時間であつたと思う。

私にとつてこの日曜毎の集いが、学校の授業全体と同じ位の生きがいを与えてくれた事を忘れる事は出来ない。今日でも会社ボケした夫より、講座仕込みの奥様の方が、知識人である事が多いと云われている事は、将来の日本を考える場合決して笑ひ事ではないと私は思っている。

我が国に、新制大学、短大制度が実施されたのは一九四九年である。この新しい制度は私の女専の夢に二つの大きな幻滅を与えた事をここで云いたい。第一は、その教育期間が三年から二年に減じられた事である。この一年の差は、女子高等教育にとつては致命的の打撃であつて、三年の女専と、新入生と卒業生しかいない短大との差は、実に天と地の差であつたと云わざるを得ない。その事は最近になって、少数者の間ではあるが、短大廃止論が囁かれ始めた事でも解るが、この差は名目だけの専攻科の設置ぐらゐで容易に埋められるものではない。

第二の衝撃は、六浦の経済、工業の二専門校が新制大学となるにつれて、学生数の確保上、その下に短期大学部を設けた事である。そうになると、三春台に女専転換の短大を独立校としておく事は混乱

を生じるので、之を右の短期大学の部として、制度上、六浦の
大学長が名義上の全短大の学長となる事になった。名称は短期大学
部学長という不思議な名称であつて、坂田、白山の二学長が相ついで六浦の大学長を兼ねてその不思議な地位につく事になった。之がわが短大の第一代学長として坂田祐氏の名が挙げられている理由である。

勿論六浦と三春台の場所的差もあつて、両所の短大は全く別個の存在で、一切の關係もなく、この二人の学長も卒業式に免状を渡す以外、女専転換のわが短大には何一つ教授会出席等の実務的關係はなかつたのである。

併しこの曖昧な法的措置が、わが短大の教員、学生に与えた精神的打撃には計り知れざるものがあつた。独立の女専の校長から短大女子部の部長に降格された私はその為一時は辞任も考えていた。今でも、関東学院史の中に、短大学長として、第一代坂田、第二代白山の説明抜きの記述を見ると、それが現代の短大の実質的学長であつた様な印象を与えるので心穏やかならざるものがあるのである。繰返して云うが、女専、女子短大の一貫しての責任者は最初の廿年間を通して私であつた。その為わが校が独立、唯一の短大になつた時、わざわざ女子の文字を短大の上に入れたのである。余談として附け加えておけば自然の成り行きで、経済、工業の両短大は数年後廃止となつている。わが短大が、独立して現在の地に移つたのは、大学紛争の経験で、女子教育の校地の分離の必要性が強く感じられた事が主な理由であるが、その点においてだけ、この愚かな大学紛争も役立つたと云つてよいかも知れない。

この文は、主として女専、短大の誕生当時の事を中心にして書く

事を依頼されたので、林前学長の偉大な業績に關しては、これ迄全く述べてない。私と林氏との關係に關しては上述の拙著に詳しく書いてあるが、この二人の短大史に於ける意義は、日本史に於ける信長・秀吉と家康のそれに似ていると云つてよい。信長、秀吉は戦亂の世を治め、國家統一の土台を築いたが、その土台の上に三〇〇年つづく江戸幕府を完成したのは家康である。更にこの三〇〇年の戦いなき日本とその中に生れた文化、経済、技術がなければ今日の日本国はなかつたと云つてよい。

従つて私は、今日の女子短大の発展と充実に對しては、心よりの敬意と喜びを表する者であるが、歴史の節目である今回の香葉会二〇周年記念に際しては、祝辞と共に二、三の学校への希望を述べさせて頂き度く思う。

第一はその歴史に關する再認識と反省の強化である。敗戦国日本は、同じ独逸に比べて、非常に敗戦の歴史認識が甘いといわれている。その点がグルメと平和ボケの今日の日本の青少年層に対する世界、殊にアジアの鋭い批判の眼となつたのである。その事は、今回の湾岸戦争に關する経過と將來に關して改めて世界の注目を集める事にならう。一國平和主義、一國繁榮主義のまかり通つた時代は終らうとしている。その事は学校としても考えていかねばならぬのではないかと思う。

例えば昨年フェリス大学長に對する右翼の銃撃の問題である。その事に関して反撃の声明文を発表したのは、明治学院、國際基督教大学その他の五つの基督教大学と地元横浜の基督教とは無關係の市大教授会だけであつた。フェリスの元院長山永君は、大学時代の私の級友であるが、今回の事件で地元のわが校が、一言の発言もし

なかった事に、彼の顔が浮んで、私は一抹の淋しさを感ぜずにはいられなかった。又、あの有名な、長崎市長の天皇戦争責任発言問題の際の右翼の暴力の件に関してもそうであった。経書房は「長崎市長への七三〇〇通の手紙」を出版し、岩波書店ですら「明治学院大学、学問の自由と天皇制」という二百頁の大冊を出しているのに、わが校は、貝の沈黙を守っていたのである。

次は、日本基督教界への協力の非積極性である。昔の女専、短大の時代には、私も含めて、常に全国の基督教世界に関して深い関係をもっていた。私だけの事を考えても、日本基督教文化学会、日本バプテスト同盟、日本基督教協議会、日本基督教文化協会等々に於いて、理事長、議長、評議員として常に深い連絡を保っていた。坂田、白山の両院長の基督教々育同盟の働きも忘れられない。併し今は関東は外の基督教界に対して首をひそめている。それ故に基督教学校と云えば、青山、明治、国際基督教大学、同志社、関西学院等の名ばかりが表に出ることになる。関東も、もう少し遠慮なく基督教界に顔を出しても、よいのではないかと私は思っている。

バプテスト同盟諸教会への働きかけも、もっと積極的でなければならぬ。女専時代の教会との蜜月関係を思うと、今の短大は巨大になりすぎて、教育実務の犠牲に於てそんな細かい事迄かまっては行れないのだという人もいるが、巨大な学校が弱少な教会を助けないと、日本の伝道の将来は暗く、学校の世俗化も進むのではないかと、心のどこかに不安のある事を述べて筆をおき度いと思う。

「私の近況」

前学長 林

淳三



香葉会の皆さん、大変ご無沙汰しておりますが、お元気でせうか。

私は昭和四二年（一九六七年）、関東学院女子短期大学へお世話になり、以来二十二年間務めま

したが、平成元年（一九八九年）三月、規程により六五歳の定年を迎え、現在は特約教授として週二日、家政科・幼児教育科の講義（食生活論、栄養学総論、小児栄養）のみを担当しています。

私が関東学院に務めるようになったのは、その昔、本校の非常勤講師をしておられた国立栄養研究所の森本きよ先生（故人）の紹介でした。初めて関東学院を訪れた時は、相川先生（学長）、兵藤先生（短大主事）、檜垣先生、上市氏（事務長）の現役の頃でした。

その時までの私は、約二〇年間、関西と関東の大学・短大や会社の研究所などを転々としていましたので、関東学院でこんなに長く、短大の経営や教育にたずさわるとは、夢にも思わぬことでした。これも神のお導きではないかと感謝しています。

さて、皆さんは、私が関東学院の責任が解かれたので、随分のんびりした生活を送っていると思われているでせう。しかし、定年になった年の四月から、東京文京区白山にある関東学院と同系の彰栄学園という保育専門学校および幼稚園をもつ学園の学園長・校長を兼ねることになり、その他一、二の学校の非常勤講師や、厚生省・文部省関係の各種委員、関係団体の役員を続けております。また、学会・研究会関係も始めだし、以前より忙しい毎日を送っています。

彰栄学園は、古くて小さい専門学校でありまして、一八九六年（明治二十九年）、アメリカバプテスト伝導教会婦人宣教師ジュネビーブ・タッピング先生により創設された学校であります。もと東京保姆伝習所、または東京保育女子学院と言われた学校でして、現在は幼稚園教員、保母や介護福祉士の養成を行っております。この彰栄学園は関東学院とは関係が深く、創始者ジュネビーブ・タッピング先生のご主人は、ヘンリー・タッピングという方で、関東学院の前身である東京学院の教育にたずさわられた方です。また、坂田祐先生をはじめ、多くの関東学院関係者が経営・教育に直接、間接に関係されてきました。現在の理事長は前関東学院常務理事の金子三郎氏であり、また、彰栄学園内の彰栄幼稚園長は、もと関東学院神学部の先生であった嘉手納二郎氏であります。さらに、現理事として関東学院々長のヒンチマン先生、現短大下田学長も関係して下さっています。

彰栄学園は共学の専門学校ですが、関東学院女子短期大学に、初めて栄養士養成や保育者養成という、職業教育を導入した者として、誠に興味深いものがあります。

関東学院女子短大は、女専創設以来、英文科・家政科の高等教育

機関として始められ、私が就任した昭和四二年には国文科が増設されたキリスト教の教えに基く女子の教養教育大学でありました。それが昭和四四年に家政科食物栄養専攻に栄養士養成課程という職業教育を始めたのであります。もちろん、その設置推進は私が中心になって行ったのでありますが、当時の教授会では、キリスト教主義女子教養系短大において、栄養士養成という職業教育が成り立つかどうかという問題で、再三にわたり討論審議が行われ、漸くにして設置が短大内で承認されたのであります。これに自信を得た私は、栄養士課程の教育が開始されるや、次の目標として、保育者養成を志しました。丁度その年、彰栄学園、当時の東京保育女子学院々長ネルソン先生から、関東学院女子短大に併合してもらえないかとの申込みがありまして、小玉先生や上市事務長とともに真剣に検討しました。その頃、関東学院六浦校地は、関東学院大学の学園紛争の火の手が燃え上がった最中でしたので、大学構内にある女子短大校舎を移転する必要もあり、幼児教育科を増設し、短大本部を東京に置くことも考えられました。しかし、これには用地、資金、運営法など種々難点があり、また、彰栄学園卒業生にも反対者があって実現しませんでした。もし、あの時、合併していれば、関東学院女子短大、彰栄学園とも違った道を歩んでいたのではないかと思えます。その彰栄学園の責任をもつことになり、思えば奇しきいんねんではないかと思われます。

さて、関東学院女子短大の幼児教育科と、彰栄保育専門学校の幼稚園教諭保母科を比較しますと、ともにキリスト教の教えに則った保育者養成機関ですが、それぞれ長短所が存在します。関東学院女子短大は総合女子短大であることから、専門学校の技術者教育にあ

り勝ちな中の狭い職業人教育ではなく、他学科の刺激を受けた大学教育のためか、本当にのびのびした人間性育成が行われている感じですが、一方では教職者教育を受けているという自覚が彰栄学園より不足しているように思われる。彰栄学園ではほとんどの全員が保育者になろうという気概がみなぎっていて、学校全体がその方向を向いています。したがって、中には有名な四年制大学や短大卒業者もいますが、一方、短大を受けて落ちた者もおり、学力のバラツキが目立ちます。その上、校舎校地が狭く、設備も劣り、専門学校ということから、もう一つ教育にゆとりが乏しいのが欠点です。最近の教職者養成はむづかしく、国立大学の教育学部でも、学生の志向が一般企業に走り、また、教員採用者の減少など問題が多いようですが、彰栄学園では九八パーセントの卒業生が幼稚園教員か、保育所、施設の保母になってくれます。しかし、男性の幼稚園教員については、志望者が多い割に、将来保証について不安定であり、まだまだ解決しなければならぬ問題が多いようです。

話が変わりますが、私のように専任教員を退き、ちよつと外側の立場から見ますと、これからの女子短大は不安定な要素を多くかゝえています。これには十八歳人口の減少、女子の高学歴化や共学志向などにもよりますが、女子短大は今までのように安逸な状態ではないにように思われます。もちろん、これは四年制大学や専門学校などと同じようではありますが、その中でも女子短大の悩みが一番大きいと思われる。遠からず女子短大は転換期を迎えなければならぬのではないでせうか。

その証拠として、多くの女子短大が四年制昇格の準備をしていたり、女子短大・女子大が共学化をはかったり、更に現在の学科を改

組して、より魅力ある学科を編成するなど、工夫しています。同窓会の皆さんも、こうした事情を汲んで頂き、関東学院女子短大のため、ご支援を願いたい。私としても、自分の人生の後半をかけた学校です。よりよく育ってくれることを願っています。私自身も学校の支援要請があれば尽力を惜しむものではありません。お互いに本校にかゝわった者として、より向上するため努力したいものです。終りに臨み、卒業生諸姉のご多幸を祈ります。



「生ける石」

学長 下田 哲



『家造りらの捨てた石が、隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』
(マルコ十二・一〇、一一)。

(これは本来は詩篇一一八・二三・二三の句であり、マルコの箇所は、その引用である。昔、ユダヤの家屋は、先ず四隅に穴を掘り、そこに大きな石をすえ、その石と石との間にアーチ形に石を積み上げて、側の壁を造る習慣であったという。この石造りの基礎となる石が「隅のかしら石」と呼ばれたのである。しかし、又、建築の最後に家の頂きにおく冠の石も「かしら石」と呼ばれている。土台であり冠である石、冠であり土台である石——この「かしら石」という言葉が、キリスト教主義学校におけるキリストの福音の位置を、まことに良く示していると思うのである。

女子専門学校として発足以来四十五年、関東学院女子短期大学において、キリストの福音が真に土台であり冠であったか——口で言

うのは易く、その実はまことに困難であることを痛切に感ずる。しかし、「すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである」(エリソット三・十一)のであるから、この土台の上に石を一つ一つ積み上げてゆき、最後に燦然と輝く「かしら石」を家の頂上に置くことができるよう、如何なる石を、如何なる方法で積み上げて来たか(ゆくか)が、私たちの大きな責任であろうと思うのである。



「主は、人には捨てられたが、神にとっては選ばれた尊い生ける石である。この主のみもとにきて、あなたがたも、それぞれ生ける石となって、霊の家に築き上げられ、聖なる祭司となって、イエス・キリストにより、神によるこぼれる霊のいけにえを、ささげなさい」
(Iペテロ二・四、五)。

イエス・キリストを土台として建てられた女子短期大学は、数多くの「生ける石」によって築き上げられてきた。教員として、宣教師として、職員として、本学を築いてこられた多くの方々がある。卒業生として、社会の各方面に、又、夫々の家庭にあって、文字通り「地の塩・世の光」として、黙々と働いておられる方々もある。まさに一万八千の有名無名の「生ける石」によって、女子短大という「霊の家」は今日迄、築き上げられて来た。本年は特に(臨時定員増認可により)、一千名を超える新入生を迎えることができた。ここ数年間は、五科合わせて二千名という、本学として最大の学生数の時期となることであろう。教育環境の整備に一層の意を注ぎたいと思っている。

◇
関東学院に關係して三十五年、そのうち、本学に直接關係するようになつて二十八年の歳月が過ぎた。私にとつて最も大きなことはこの「室ノ木キャンパス」への移動である。二〇年近い年月をかけてなされたこの期間中、常に私の脳裡にあつたのは、次の聖句であつた。献堂式には常に読んだ。

「もろもろの谷は高くせられ、

もろもろの山と丘とは低くせられ、

高低のある地は平らになり、

険しい所は平地となる。

こうして主の栄光があらわれ、

人は皆ともにこれを見る」

(イザヤ書四〇・四、五)

この言葉の通りに、小高い丘(ハンソン山)がけずられ、整地され、平地となつた処に、次々と校舎が建てられた。多くの方々の御苦労によつて、この地に女子の学園にふさわしいキャンパスを創り上げるといふ我々の夢と希望は実現した。シンボルとなるチャペルも既にでき、立派なパイオルガンも設置済みである。卒業式・入学式をチャペルで行いたいという私の最大の望みも既に実現されている。

しかしながら、唯、外觀の美しさと完成を誇り、満足するのではなく、その内実においても真に

「主の栄光があらわれ、

人は皆ともにこれを見る」

学園に創り上げてゆかなければならない。内面的な地味な努力を着

実に続けてゆくこと——それが、今、我々すべてに望まれ、必要とされていることだと私は思う。

◇
社会情勢の急激な変化によつて、短期大学教育の大きな変革が要請されている。カリキュラムを始め、あらゆる面において、根本的に見直しをしなければならぬ時となっている。改革は必要であり、時代の要請である。現代に対応した教育を模索せねばならないのは、当然のことである。しかしながら、今こそ、次の聖句を銘記すべきである。

「あなたは心のうちに『自分の力と自分の手の働きで、わたしはこの富を得た』と言つてはならない。あなたはあなたの神、主を覚えなければならぬ。もし、あなたの神、主を忘れて他の神々に従い、これに仕え、これを拜むならば……あなたがたはきつと滅びるのであらう」

(申命記八・二十七—九)

本学の根本であり、土台である建学の精神を忘れてはならない。先人たちの血のにじむような労苦を無視するような、性急な声高な改革、変革であつてはならない。

私に残された(学長としての)期間は、一年余である。終りが近づいてきたという実感が日々に増してきている。

卒業生の皆さんの御健闘を祈ると共に、御支援を心より願う。

記念号発刊を祝して

元事務長 上市 二郎



平成三年は、短期大学が設立されてから、早くも四十一年目を迎えたのであります。この

年、「香葉」の第二十号の記念号を発刊されることは大変喜ばしいことです。心からお祝い申し上げます。今日、ここまで続けてこられたことは、役員の方々および選ばれた代々の編集委員の並々ならぬご苦労があったことを思い、感謝の念を禁じえない者の一入です。

さて、毎号「覚え書」の形で会員の皆さんのお目を煩わしておりますが、今回は記念号のため、これをお休みして「香葉」の生い立ちについて、何か書くように言われました。しかし、実務を離れて早くも六年以上、七十一歳の峠を越しますと、仲々思うように筆も運びませんが、心からお祝いの言葉として少々思い出すままに記してみました。

そもそも、関東学院は米国北部バプテスト

派に属した唯一の男子校でありましたが（日本に於ける同派の女子の学校は、北は仙台市の尚絅女学院、南は姫路市の日ノ本学園、横浜

浜市は神奈川区の捜真女学院があるのです）戦後、新しく女子の高等教育を始めることになり、昭和二十一年英文科・家政科を有する女子専門学校（以下女専という）を設立し、昭和二十三年には英語科・家政科を持つ女子

高等学校（以下女子高という）を併設したのです。当時の責任者、初代校長の相川高秋先生は、教育・経営両面に互って大変ご苦労が多かったことを思い出します。その後、学制改革によりまして、昭和二十五年短期大学（以下短大という）となり、この頃夜間に英語学校（各種学校）がありました。昭和二十六年短

大期大学英文科第二部が誕生したのです。女子高三年、短大二年の専門課程を終えられた卒業生は、その専門を生かして社会に貢献しています。旧関東学院中学部（男子校）が、新

制度の共学の高等学校として既に存在していましたので、残念ながら女子高は廃止され、また、昭和四十三年度から大学に文学部が増設される頃、短大英文科第二部も廃止された

のです。しかし、これらの卒業生は全員香葉

会の会員となっております。

昭和三十年代になって、女専、女子高、短大の卒業生の声として「独自の同窓会を是非作りた」と言う希望がありました。このことは既に「覚え書」に於ても少々触れたことがあります。当時は卒業生の数も少ないので大学の同窓会（燦葉会）の一支部として活動して

ておりました。ところが、昭和四十五年、短期大学の創立二十周年を迎える頃には、卒業生の数も三千名を超えるようになりました。燦葉会から分離して、独立した同窓会を作ることになりました。これについては、当時の燦葉会々長、

今は亡き加藤亮三氏のご理解がありました。とと、当時の短期大学学長林淳三先生の暖かいご支援がありましたこと、など思い出します。丁度この頃は関東学院全体の同窓会即ち

関東学院合同同窓会が出来まして、各学校毎に部会活動に移る時期でもありました。

そうして、昭和四十五年六月下旬設立総会が開かれ、念願の同窓会が誕生したという訳です。会の名称については、既に設立準備委員会に於いて何回も討議が重ねられました。ものを、当日は十種類以上総べて提示して投票

いたし「香葉会」と決定いたしました。その時

女専のページ

—ポストンから—

石井多恵子（時田）

★五月十四日、トレドーに住むリンダ（ドーン・フラワーズ）旧姓故時田暁子の娘）を訪ねるため、私達は汽車に乗った。日本を出る前に四十五日間乗れる切符を買っていたから、本来なら飛行機に乗った方がよいと思われる程の距離がある。ポストンから十七時間の旅であるが、寝台車の切符を手に入れていたから、気持は楽だった。それにこちらの寝台車には興味があった。それは個室になっていて、私達のは二人用であり、窓際に沿って幅一メートル、長さが二メートル程のスペースがあった。ベッドは二段で使用していない時は上段はそのままはね上げて壁に押しつけると、七インチ（十八センチ）くらいの厚さに納まる。それにトイレと洗面台がついていた。洗面台も使用していない時は壁に押しつけることができる。この列車が出来たのは、もうかなり昔のことと思われるが、とても丈夫なつくりなので、今でも現役でつかわれている。

て毎年色を代えるようにし、その数も五種類ぐらいに限定すれば六年目に同じ色の冊子が並ぶことにもなるし、増えてゆくのが楽しいのではないだろうか、など。そうなれば、表紙絵は毎号同じものを使用しても良いのでは、との多数の考えのもと、関頼武先生（元関東学院六浦小学校の教師で、夫人が短大英文科第二回卒の旧姓田村美代子さんです）に依頼して出来上がったのです。しかし年が過ぎるに従って、表紙も編集委員の好みの色に変わってゆくように思われ、そこに時代の流行色も入って特色を生かそうと努力していることが感じられますが、当初はそのような考え方で始められましたことを記しておきましょう。家庭夫人として常に忙しい毎日、また色々責任ある職場で忙しい毎日を過ごされている会員のご協力とご援助をもって、これから十年、第三十号記念号の発刊出来る日を期待しております。その頃は、女子短期大学も創立五十周年を迎えた意義ある年となることでしよう。会の発足以来、古城会長を中心に、役員の方々のご努力によって今日の香葉会があることを思い、心から感謝いたすと共に益々充実発展されますことを祈念いたし、少し思い出を述べてお祝いの言葉といたします。

のことを思い出すと女性に最も適したものが多くあったようでした。しかし、学院の校章は平和の象徴であるオリブ（橄欖）の葉と花を各校がデザインして使用しておりますことなどを考え合わせて決定をみたのでしよう。大学、短大は三枚の葉、即ち三ツ葉、これは、智育・徳育・体育を表わし、その付け根の若芽が三育にはぐくまれる学生を表わしているのです。と、在学中に説明されたことを思い出されることでしょう。従って、三ツの葉が燦然と輝くことを意味して、大学は同窓会の名称を燦葉会と名付けられ、三春台校地の中学・高等学校の同窓会はズバリ橄欖会と称し、六浦校地の中学・高等学校は六葉会となっております。オリブの花については、故水船六洲先生（女専の頃、美術・美術史を担当）のデザインにより両中高校並びに両小学校および両幼稚園で校章として現在も使用されております。

独立の同窓会ともなれば、会誌の発行が当然考えられます。その形式は新聞のようにするか、またはタブロイド判ではどうか、色々意見が出ましたが、号数が増えても保管し易いように、小さな冊子でゆこうということになった訳です。表紙は色つきラシャ紙を使っ



リンダの家族



ドーンに墓に花を植えて、リンダと私

列車の運行回数は少なく、ポストン—シカゴ間は一日一回である。車窓から見える景色は原野がかなり多く（北海道の景色によく似ている）時々街が鉄道沿いに現われる。オーパニーには一時間近く止まるが、ここはニューヨークを小型にしたような感じの街である。オーパニーの東にある多くの農家の畑は非常に大きく、リンゴやブドウが見られた。食堂は予約をとりに係りの人がききにくるが、私達は売店でランチを買って食べた。何種類かのサンドイッチと飲物を売っているから、その度に別のを買うことができた。寝台車の世話をする乗務員は、住きも帰りも女の人であった。シカゴからポストンまでずっと同じ人が受け持っているのだから大変な仕事である。リンダは駅まで迎えに来てくれたが、とても元気そうであった。家に荷物を置き、ドーンのお墓へ行ったが、リンダは根のついた花をもったいたので私達も途中で花を買った。こちらでは地面に直接花を植えるのである。ドーンのお墓の隣りに、リンダの祖父のお墓がある。午後、幼稚園から帰った末娘のジュネーと一緒にエリー湖を見に行った。車で二分程だが、さすがに大きく対岸は見えない。水は少し黄色っぽい色がついていて、リンダ

にきくと、水が余りきれいでないので湖では泳がないようだ。砂浜には貝殻が沢山ありジュネーは拾ってあそんでいた。夕方、七才のジャスティンがサッカーの試合にでるといので皆と一緒に見に行く。ものすごく広々とした芝生の競技場で、幾組ものチームが、サッカーやバスケットをやっていたが、ジャスティンの相手はやはり少年チームで小学校の低学年という感じである。コーチやレフリーが真剣そのもので指導やジャッジをしている。前に日本に来たジャリアンは九才で、すっかりおとなしくなっていた。バレエダンスを習っていたとのことだが、他のことが忙しくてやめたと言っていた。

★このアパートに一人の三世の学生がおられ、その方の父上は二世としては初めて博士号を授与されたそうだ。その方の研究テーマは日本の神道で、十年前にはしばらく日本に留学しておられたとのことだ。この間、彼女が本を三冊貸してくださったが、そのうちの一冊は短歌で、戦時中に収容所の中で多くの人に よって書かれたもの、もう一冊は戦時中の思い出を聞き書したもの、あと一冊はまだよく読んでいないが、クリスチャン達による信仰の証のようだ。これらが作られた動機は、キ

リスト教が日本の移民の方達に伝えられてから百年が経つ、その記念としてであるという。私達日本人は、自分達のごとで一杯で、移民や二世の人たちのご苦労は余り深く考えたことがないのを申し訳なく思うと同時に、日本ではもう殆ど戦争の記憶は風化してしまつて、記録を残そうという努力があまりないことを思い起こされた。文化の相違なのだろうが、日本ではすべてを水に流すという考え方があつて、済んだことはお互いに忘れるように努力する。しかし外国にはその様な考え方は通用しない。最近見た雑誌にも、ヨーロッパでは、ドイツと日本を比較して、ドイツが戦争の原因や責任について真剣に考え、議論しているのに対し、日本では全然そういう態度がないことを批判している、と書かれていた。(文芸春秋五月号) 日本でも、遅滞ながら、そのような議論をして、記録を残し、若者によい指標を示さなくてはならないのではないだろうか。

(女専英三)
へーアメリカ見て歩きーより抜粋、文責古城

私の履歴書

リーディ実子(田中)

私が卒業した学校は、何故かその名称が殆ど全部変つてしまつた。捜真女学校は捜真学院、関東学院女子専門学校は、関東学院女子短期大学、アメリカ、カンサス州のオタワ大学はそのままOttawa University、Berkeley Baptist Divinity SchoolはAmerican Baptist Seminary of the West...と。これは何でもないようで私には何か一抹のさびしさといふのか、私などはもう忘却の彼方へ追いやられ、それぞれの学校には、私は何の意味も、足跡も残していないのだという事を認識させられる。この四つの母校と一応何らかのかかわりを今でも持っている。併しそれは単なる私のノスタルジアに過ぎず、間もなく終ろうとしている私の人生にとっては、それぞれの学校で、大切な思い出や出会いが沢山あつた。

私は捜真で七年半英語を担当し、一九六四年の春、結婚してUnited Methodist Churchの宣教師になつた。私の学歴を見るとアメリカカンパテストの人間では、と思われる節が多いのだが、実は私は元Evangelical United Brethren (現在はキリスト教団)の教会で十八才のクリスマスに洗礼を受け、数年前、

E・U・B・とメソジストが合併しU・M・C・となつたわけで最初から私の出発は軌道に乗せられていた様な気がする。

私は二人の子供達が学童になり、一人で家にいるのは勿体ないと思ひ、宣教師として任地と定められた青山学院の女子短期大学で、英語講義を教える事になつた。ミスターリーディは、「大学は男性生徒がいるから短期大学にしないさい。」と、「私をそんなに信頼していいのですか。」と云う問いに対して、「あなたは信じているが、世の男性を信じていない。」と云う事だつた。青山で教えはじめて、十数年になるが、担当は私の専攻したキリスト教教育学ではなく、英語講義だつた。英語講義二コマと聖研、家庭の主婦としての大任を完璧に果たしたい私にとっては恰好のアルバイトだつた。幸いな事に当時の学長は、「教材は何でもよい」と仰言つたので私は嬉しくなつていろいろ思いめぐらした。女専時代にうっとり聞いた相川先生の「Forsyte Saga」と思ったが、私には先生の様に魅力のある講義は無理と判つたのでやめた。大塚先生の「Little Women」は、一年通してそれをするのも私の個性が発揮できないと、それもやめた。私は私なりに神学校で読んだH.Ginotti

の Between Parent and Child が、たまたまテキストブックに収録されていたので、児童教育科の学生には最適とそれを選んだ。そしてもう一冊は、Kathy Ann, Kindergarten by Frances Dunlap Heron と、母親が四才半の園児になって書いた珠玉の一篇を、テキストブックにまとめて学生と読んだ。国広先生（小滝先生）の A Cup of Tea by K. Mansfield は短篇で、どうしても学生と読みたかったのでそれもやった。どれもこれも学生には人気があり、毎年同じ教材でも、生徒は変わるのだし、一人の教師の個性を生かすためにはこれで良いと私なりに思った。どのテキストブックも示唆にとんだもので、どれも切りすてられなかった。

一年間のアサインメントの一つに教会学校を訪問して、幼児教育の一端を見学し、レポートを書かせて来た。これが思いがけない事を沢山明らかにした。教会に行った事のない学生が一杯いるという事、「又、行きたいと思った。」という学生が何人かいた事、教会へ子供達を送り出す親はクリスチャンなのか？という疑問、すべてが私の意図とする事で、これも止めずに毎年行ってきた。私は宣教師として教壇に立っている。一人でもクリスチャンが

生まれる事を願って…。教会など、どうでもよいという事はない。百年以上の歴史を持つ日本のキリスト教の発展は余りにもおそいというその原因など、私達はクリスチャンスクールで学んだ者として考えるべきではないだろうか。数年前、横浜の実家を訪ね、その帰りに、六角橋の商店街で私の教え子に声をかけられた。「先生にお話ししたい事があるのです。その辺でお茶でものみ乍ら…。」とさそわれたので、二人でドーナツショップに入っておしゃべりをした。彼女は複真時代にクリスチャンになる機会をいっしたのだが、いつも「先生のようにになりたい。」と口ぐせのように云っていた。英語を一生けんめい勉強して外国の人と話せるようになりたい。アメリカ人と結婚もしたい。クリスチャンにもなりたい。

…という事だった。その時彼女は、彼女の願望の殆どが叶えられ、「今、米国から里帰り、主人と子供は置いてきました。今度、子供達と一緒に受洗をします。…」と、これが、彼女のその日のビッグニュースだった。私はアメリカの彼女の家にもおじゃました事がある。彼女の運転で空港に出迎えてもらい、彼女の手料理をご馳走になり、アメリカ人のご主人と一緒に英語で応対する彼女は明るく自信に

みちていた。彼女は私の母教会によく来ていた。たしか教会学校では通統六年間一緒に過ごした様に記憶している。私は今でも教会の仕事はおろそかにしていない。こういう人が一人でも生まれる事を念願している。

一九九四年に私達は日本を去って帰還する。私は今アメリカの国籍を持っているが、未だかつて自分が日本人ではなくアメリカ人なのだと思つた事は一度もない。ミスターリーディが便宜上そうした方がよいと云うのでそうしたまでで、今の仕事から帰還するという事実には直面するまで自分の国籍の事を思う機会はなかった。私は二十七年間、田中実子からミセスリーディに姓を変えて与えられた場所がらんばって来たわけだが、米国に行ったら日本人、いや国際人、いやクリスチャンとして主の證人との役わりを果していきたくと思つている。私はキリスト教とは全く関係のない家庭に育つたが、キリスト教学校に入ったのがきっかけでクリスチャンになり、私の本當の国籍は天国にあるのである。

パウロはこう云っている。
「そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒達と同じ国籍の者であり、神の家族なのである。」(エペソ人への手紙) (第二章十九節)



短大香葉会のあゆみ

1949 (S24)

女専第1回卒業生誕生!!
57名

1948 (S23)

女子高等学校併設

1946 (S21)

関東学院女子専門学校
(英文科・家政科) 設立

1884 (M17)

横浜バプテスト
神学校設立
関東学院の種が
まかれました



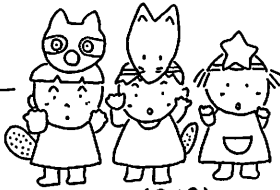
1919 (T8)

三春台の地に
中学関東学院設立

1717
1919 カントウガクイン!!

1950 (S25)

関東学院大学
短期大学部となる
女子高第1回生 30名



1973 (S48)

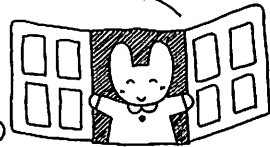
幼児教育科 増設

1978 (S53)

同窓会名簿出版

1979 (S54)

短大全科 室の木校地に
移転



1980 (S55)

短大創立 30周年

1981 (S56)

「香葉」第10号記念号を発行
親子二代 短大生活を
送った卒業生の座談会実施



1985 (S60)

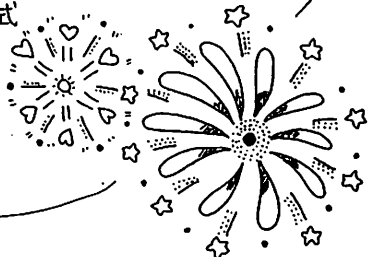
香葉会総会を11月の
短大祭に合わせ
講演会実施
第1回講師 作家 永井路子先生

1984 (S59)

10月6日 関東学院
創立100周年記念式

1982 (S57)

会員数 10,000人を突破!!





1957 (S32)

関東学院短期大学に改組

1960 (S35)

関東学院大学 ^{学生会} 図書会の
支部として活動も始める

初代支部長 田中 実子

1953 (S28)

家政科 六浦の地
に移転

1954 (S29)

続いて 英文科、二部も六浦へ

1952 (S27)

短大第1回生

英文科 33名
家政科 11名

1951 (S26)

英文科第二部増設



二部には
男子も
いるぞ!!



1970 (S45)

香葉会発足 会長 古城 房子
会員数 3000 余名にスタート!!

「香葉」第1号発行

1966 (S41)

国文科増設

1967 (S42)

関東学院女子短期大学に名称変更
同年二部 廃止



1991 (H3)

「香葉」第20号発行

会員数 17,308人に!!

英文科 40回

家政科 40回

国文科 24回

幼児教育科 17回

経営情報科 3回

1989 (H1)

パイプオルガン完成

11月5日

ジグモント・ワットマリ-氏
による演奏会を協賛
同窓会名簿 出版

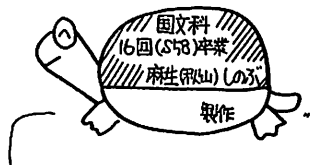


1987 (S62)

経営情報科 増設

チャペル完成

女子教育40年記念式挙行



思い出の写真集



昭和30年代 1号館



昭和45年頃 校舎



昭和35年頃 教職員



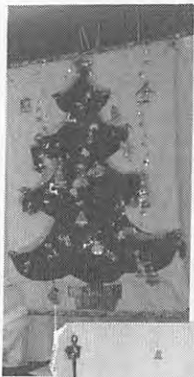
パイプオルガン



↑
チャペル



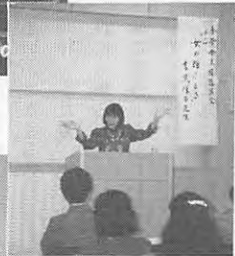
現在の短大です



手作りのX'masツリー



昨年の香葉室(短大祭において)



講演会風景

海外からのお便り

香葉発刊二〇号を記念して外国に住んでいらっしゃる会員の方々に寄稿をお願いしました。お返事の少なかつたのは残念ですが、お忙しいのでしよう。

お返事を戴いた方々に心からお礼申し上げます。長い間、外国の地にあって、充実した人生、日本への思いを語って戴き教えられる事が多々あり感謝いたします。

オレゴン州セーラム市より

クリスチャン道子（岩城）



第二次世界大戦が終ってから五十年近く、アメリカに來てから三十八年になります。戦争が終って混乱の中で、関東学院短大をとうしてY・Y・Fに友達を見つけ、楽しい生き甲斐のある日々を送った事を今でも感謝しています。

子供の時からアメリカの映画を見ては、いつかアメリカへ行きたいと思っていました。

タッピング先生の紹介で、オレゴン州セーラム市教会の婦人達からの援助でリンフィールド大学に留学し、一九五三年から五六年まで勉強しました。その頃は留學生の誰もが英文科を専攻するのが普通でしたので、私もそうしました。特に何を勉強するというより、アメリカでの生活が味わえることに非常に満足を感じていました。

リンフィールド大学を卒業して、ウイスコンシン大学に行き、もっと勉強しなかったのですが、英文科はそんなに簡単では無いことに気がつき、美術教育に専攻を変え、却ってとても楽しい学業、油絵、水彩画、デザイン、陶芸、そして版画などの新しい勉強をしました。卒業してから六年余交際していた今の主人と結婚して、仕事のためにアメリカの四八州に渡って旅行しましたが、これは私にとって一番のアメリカ勉強になったと思います。

今、セーラム市に住んでいます。リンフィールド大学の近いこの町に、又帰って来るとは自分ながら驚くばかりです。主人はセーラムの清い飲み水に感銘したと云っています。長い旅をやめて、セーラム市に落ち着いた時に

はほっとしました。

セーラムはオレゴン州の首都で、自然に恵まれた小さい町です。北には西部大都市の一つであるポートランド、南には二つの州立大学があり、東は砂漠、森林や湖に恵まれて、西には一時間でドライブして行ける太平洋が広まっています。セーラムに來る前に非常に感慨深い経験にぶつかりました。西部に移住しようとしてドライブしていた時、セントヘレン山が噴火して、私たちは落ちて來る息詰まるような灰の中を無我夢中で車を走らせて、やっと休息パークにたどりつき、五日四晩も車の中で寝た事は全く言葉に表現出来ない程、自然の威力を切実に感じさせられました。

セーラムに住む様になって、もう十一年になります。始めの二、三年は美術のエアブラッシュの教え方を色々研究しましたが、それもプランだけで、未だに実行していません。思いがけなく日本語を教えることになって、四年とふた夏、市の短期大学で教えました。誰にも頼ることが出来なかった私は、一生懸命に勉強しながら教えました。一九八五年の事で、あまり日本語を教えている人達がセーラムには見つからなかつたからでした。今年はウラメット大学で一年臨時に教えています。

が、主人が日本語を教えたい—主人は日本語も話せないくせに—と言うので、そのプランを立てています。翻訳サービスも出来ればして見ようと思っています。

アメリカに来てから四十年近くなり、米国の印象は勿論変わりました。でも子供の時に憧れていたアメリカの印象は変わっていません。本当の社会を目の前に見て、却ってそれが強められたのだと思います。

アメリカは競争の激しい社会で、それが一般的に教育、生活、政治、企業、その他に見られます。生活の標準を高めるためには、ある人々は二つも三つもの仕事をして収入の補助に努力します。例えば先生達の中には、夏休みに臨時の仕事をしたり、生徒などはパートタイムの仕事をして学校へ行く高校生や大学生は普通です。競争心の最も強い現れはスポーツです。勝つためには必死になって闘い、時には規則に違反する事もあります。この競争心はグルーブスポーツによく現れています。応援する人達が夢中になっている事でわかります。最近の湾岸戦争でもその意気が見られました。

勿論戦争とスポーツは目的が違いますが、アメリカの大部分の人達は戦争の始まる前は

反対する人も多かつたけれど、クエイトをイラクから解放するために国連軍を後援しました。アメリカ人は個人主義だと批判されますが、

それは良い意味で米国の根本の思想であり人々の誇りにする主義なのだと思います。それでは多くの人は隣人が困難にあつたり、どん底にある時に多くの人達は同情して、助けの手を差し伸べると言う温かい心情は何時も、何処でも見られます。これは私たちが戦争の後でアメリカの兵隊達や宣教師達が親切にくれた事を見ても、又今度のクルド避難民を援助しようとする努力している事を見ても納得出来ます。自由、特に個人の自由を保つ為に必死に闘うのがアメリカ人の特徴だと思います。

それは米国の独立の歴史と人権の発展を見てもわかります。自由なくしては生きて行けないとのモットーの現れは、この度のクエイトを解放する戦争になったのだと信じます。政治的な判断は別として、アメリカ人の性格がこの闘争によく現れています。

種々の人種が集まって平和に暮らして行くことと努力する人々と政府には誇りを感じます。私達の住んでいるアパートはその典型的なもので、黒人、南米人又東南アジア人が一緒に交

際しなければならぬと言うわけではなく、個人の自由にまかせて、自由にくらせることです。

老人に対する一般の態度は尊敬と言うより、老後の毎日を楽しんで貰いたいと言う一般の態度と、老人には個人の自由が尊ばれて、独立して生活出来る事を望んで色々の便宜や援助が与えられています。老人センターが各所に設けられて、多くのプログラムがあり、美術、スポーツ、社交ダンス等、又昼食も安く食べられます。病気の老人達には食事も配達され、不自由な人達にはパンでの送り迎えをする便宜も与えられています。商店から割引券が送られ、レストランや映画なども割引で入れる便宜があります。私達はマクドナルドやバーガーキングでフリーコーヒーを楽しみます。日本の事情は毎日のようにテレビや短波ラジオで聞いて、経済的にも文化的にも随分変わって来て、わたしが日本を去ったところと全く違うように聞いています。

最近日本を批判する声が聞こえますが、日本には日本の立場があり、他国がどんなであろうが、どんな批評をしようが自分の立場を第一に考える事が大切でしょう。アメリカにも色々な問題があり、又他国から批判されま

すが、自分の信じている事に自信を持って行けば、何時でも難しい問題は解決出来るのではないかと思えます。

どうぞ、お元気で暮らして下さい。太平洋のこちらから皆さんの健康を祈って。

(短英一)

米国から日本を見て

デッシンガー百々代(鈴木)



私は、一九五四年五月にサンフランシスコ・ステイッツ・ユニバーシティー(サンフランシスコ州立大学)の留学生として米国に参りました。私は短大卒業後教職につき予定でしたが、限られた将来しか予測出来ず、又未知の世界に取組みたいと云う意欲にかられて留

学の機会をつかみました。当時、日本政府は留学生に三十ドルしか持たせてくれず文字通りの苦学生でした。

大学では人類学を専攻し、三年間の猛勉強の後に卒業、結婚、育児、と続いて三十七年の歳月が去りました。この間、日本にも数回里帰りをし、アメリカ国内各地を始め、メキシコ、ヨーロッパ各国を何回か旅し、カリブ海の島々、南米のブラジル迄、歩き廻る事ができ私の未知の世界への夢ははたす事が出来ました。

一九六一年に私共も、大都市脱出組の流行に乗ってサンフランシスコから南に五十キロ程のサンマテオ郡西海岸にある小さな集落エル・グラナダに移り、子供達もここで大きくなりました。

氣候温暖、風光明媚の此の地方は、十八世紀の中頃迄カリホルニアインディアン、コストノスの世界でしたが、スペインの手中に入ってからミッションの牧場農園を皮切りに、ポルトガル系イタリア系が入植、各国からの移民が農業、赤杉の伐採、漁業に従事し、今世紀の始めにはサンフランシスコの人々の避暑地ともなりました。第二次大戦後の急速な人口増加と共に、大都市に近い事から現在はずっ

かり中産階級のベッタウンになりましたが、今でも野菜農業、特に花栽培、漁業は盛んで、最近では観光ブームも加わり当地のカボチャ祭は有名で大変な人出となります。又、ハーフムーンベイ(半月湾)の海は青く澄み、高く聳へ立つユーカリの林や、巨大なモンテレー松の繁る丘は野性的で人々にやすらぎを与えてくれて自然を身近に楽しめる所です。

私は、一九六八年から現在もずっとサンマテオ郡立図書館に勤務し、初めは当地の小さなしかし活気のある図書館で働き仕事を自分のものにする事ができ幸せでしたが、十年後に州税金の切り下げで閉館とされ、隣の図書館に転動となりました。ちなみにカリホルニア州は、日本と同じ大きさで「郡」は日本の「県」に相当するものです。此の町も昔は静かな田舎町でしたが、ここ数年間の人口増加はめざましく、周辺の集落と合せると人口は二万、最近ではメキシコからの農業労働者とその家族が多く移り住み、図書館も活気をおびて来て、当館の使用率は、郡立図書館十二館中のトップとなりました。毎月貸出は三万冊を越えます。仕事は絶え間なく忙しいのですが、私は赤十字の奉仕活動もして居り、日本系の英語の不自由な人々の為に公的な面

での通訳、翻訳の仕事も要求に応じて手伝って居ります。

種々な人種、文化、習慣の混り合う世界の縮図のアメリカですが、カリホルニア州は特に近年ヨーロッパ系を凌ぐ勢いで他民族が寄り合う土地です。従って社会は開放的でなければならず、人権擁護を地で行く人々が他州よりもずっと多い所です。他人に危害を与えない範囲で自己を主張し又、何でも受入れられる寛容な社会です。

この寛容さを應用して世間を困らせる人々も多く居りますが、一見まとまりのない軽薄にも見えるこの社会の根本にある思想はゆるぎもなく自由、平等、博愛です。人々の偏見は、肌の色よりも未知に対する恐怖から来て居ります。アメリカ各地で相互を理解し合うための種々な運動が進められて居りますが、当地でも問題の外人労働者達の為に図書館を中心に奉仕的な活動が進められて居ります。彼等が気軽に英語を修得する事が出来る機会を与え、私共もスペイン語で応待出来る様に努力して居ります。

こうして過去を振り返って見ますと、種々な事が思い出されますが、私の我儘を許してくれた日本の家族又、私に種々な機会を与え

てくれたアメリカの人々、私に協力してくれた私の家族に感謝の気持ちで一杯です。私が海のこちら側で精一杯頑張って居た間に、海向うの日本人々も随分と活躍して遂にアメリカの槍玉に上る程の経済大国となり世界中の人々の驚異のもととなりました。本当に大したものだと敬服します。

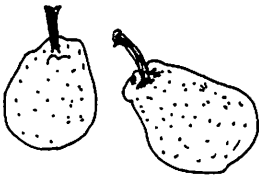
最近の日本では、国際化が叫ばれて居るとの事ですが、大国になった今日、商業面だけ他国との交流を深めるだけでなく、人道的な立場からも日本の影響力をまわしていただきたく思います。

アメリカが、国連を代表して中東の不法行為に挑戦しましたが、これも「力」でしか解決出来なかつた事は非常に残念な事でした。又この為にクルド人達が犠牲になった事は悲劇でした。この事に対して日本の反応が遅かつたのは、イラクが中東の六十パーセントの石油を握る事にあまり心配する必要もなく又、侵略者を追い返すと云う事も日本には関係のない事と見た為かもしれません。しかし、本当に国際化を進めたいと望んで居たのなら、政府も民間団体もこの機会を生かして早急に積極的に対応すべきでした。日本の政治家達が見たとされる様に、この争いは単にアメ

リカとイラク独裁者の石油をめぐるの利害関係のものではなく、世界中の大部分の人々の侵略者に対する抗議でもあつた事は確かです。

各国の利害がからんで、国連の力はまだまだ弱く本当に人道的な立場から世界の福祉を守る事は大変困難です。この様な世界状況の中で、日本が本当に世界の大国らしい大国になる為には、国連の中核としての役割と責任をはたし、積極的に世界情勢に反応し、又働きかけて行かなければならないと思います。

日本が、地球保護と、世界平和、世界福祉の為に日本だけでなく世界中の人々の為に、人類の為に、立ち上る事を二十一世紀の課題とされる様又、それが果される様願ってやみません。



短英二

吉武輝子先生講演会 ——「女が輝く時」を聴き終えて——



吉武輝子先生

「女が輝く時」というタイトルだったが、その内容は、もっとグローバルにこれからの二十一世紀に向い、人生が五〇年から八〇年に移行しつつある今を、どう生きたら良いか考えていきたいというもので、リアリティーに富み、かなり痛烈な提言となった。又一人娘のあずささんの看護婦への転職、別居も絡まり、話が現実的で身近に感じられ、より一層、刺激を与えてくれた。

仕事柄、テレビの身上相談花盛り時代より今日に至るも吉武家には相談者が多く、内容も移り変りが激しくそれぞれにデータ分析や調査等をされている——

そして先生は、これらの相談者を半面教師として、良く話を聞いてあげ一緒に考えてあげるという方法でやって来られ、実は娘さんもかなり影響を受けて転職したという。

相談の内容は、大きく三つのグループに分けられ、それぞれいくつかの症例で説明される。

一、空の巣症候群現象

サラリーマン家庭の専業主婦が、〈お母さん〉ということを目に生きてきて、夫にも内助の功で尽し、気が付いたら子供も巣立ち、夫も仕事にのめり込み、家の中（これが巣の意）に残っている

のは自分一人。家の空っぽが心の空っぽ、人生の空っぽに通じ、これから先、誰に認められ、必要とされ、何を目的に生きていいかわからない——というものでひどい人は、ノイローゼになったり、アルコール中毒、離婚まである。

二、母子癒着現象

子供をきちんとそだてると空っぽになってしまふ、それがイヤだから、つい子供を抱き込んでいつまでも「お母さん」と呼ばせることで、出来るだけ母親定年を先に延ばそうという、いじらしいまでの母子の生き甲斐探し——これらは、その影響下それぞれ形を変えいろいろな問題になり始めている。例えば大学を出たがらない子供、大人になり切れない大人、三〇を過ぎても定職もなく親の脛をかじり結婚もしない息子、結婚一カ年未満の離婚、この最後の「結婚一カ年未満の離婚」が母子癒着の最たるもので、先生も「笑えないんです」とおっしゃる。

人間が「おぎゃー」と生まれて、人間として認められたいという思いと、生きていく限り必要とされ続けたいと願うのは老若男女関係無く、人間の素朴な根源的な欲求で、段々歳を重ね、孤独感が深まることより一層認められたい、必要とされたいと思うものである——

結婚させた双方のお母さんが自分の息子、娘の新たな家庭にやって来て、何もかもやってしまい、どちらが認められるか、必要とされているか競争するという現実、その為に若い夫婦が駄目になっていく。

——単なる女の愚かしさとは言えないようだ。

こういうケースの相談はイヤなものである。

三、定年退職後の夫の家庭内暴力

男が家庭を妻に任せ、子供も任せ、身軽に外で働く、男^Ⅱ職業人というのが五〇年型の方程式だったが、今は退職後が延びて来ている。そして家族とも地域社会とも良い関係を持っていない、人生にも指定席がない。何職というのも取っばらわれ、何者であるかが解らなくなってしまう。しかし自分は偉くなくてはと、最後に妻だけを支配する。揚げ句の果ての暴力。

ここでは、日本という風土がその歴史においていかに男と女を固定して確立してきたかということにまで及び、深く考えさせられた。つまり男はプライドを持ち、仕事をし、偉くなくてはと思ひ込まされ、女はそういう男に尽すものと位置付けられる。しかし人生が三〇年長くなればそういう事も言っただけで、人間本来の愚かしさや淋しき、悲しき、いじらしさをさらけ出して生きていかななくてはならない。だから退職後の夫は、いつまでも壮年期の職業感を引ずっていなければならない程、立ち直りも遅く、益々自己喪失感が強くなってしまふ。

例として、お近くの七十四才、七十八才の老夫婦の話をされるが、これはかなり生々しく衝撃的だった。

このご夫婦には一人息子が居て、夫は働き蜂で、息子に生きて来て、やがて息子も結婚し子供をもうけ同居を望んでいたが嫁が、夫にもならない親にもならない息子の存在に困り五年目で春日部へと引越してしまふ。そして残された夫婦は、向き合っても何の関係も作れず、心の中木枯らしが鳴り渡り、先生のお母さんの所へ奥さんは遊びに来るようになった。そしてあの日も五時迄喋って、夕飯を

作らなければ戻って行き、夜十一時頃ベルが鳴り、「婆さんがおかしい。来てくれ」と言われ、娘と飛んで行き一步部屋に入り愕然とする。居間の真ん中に丸裸にされ丸太棒のように転がされている奥さん。「どうしたんですか。」と聞くと、珍しく頭が痛い早く部屋に引きこもり、十一時過ぎに二階から降りて来てゴ—ゴ—たる肝を聞き、びっくりして戸を開け、昏睡状態で失禁している奥さんのパンツを脱がせ隣りまで転がして行くが、下着の在るところが解らず着替えをさせられない始末。——ここであずささんが、「奥さんの身仕舞いも出来ないんですか？ 下着や寝間着を採す才覚も持ち合わせておいでにならない。」と、物凄く怒ったという。そして救急車を呼ぶが時間の経過といじり過ぎという事で意識回復もせず亡くなられる。半月後夫が息子夫婦と挨拶に来られ、「これから、息子達と一緒に暮らすことになりました。」と、言っただけで姿に『老い』というものが滲み出ているような気がした……。

この、ご夫婦が全て今日のテーマを凝縮しているようで、やり切れない思いのなか、これからの課題も多く、取り組んでいくのは誰でもなく自分自身であり、今日の吉武先生の提言を基に、いろいろな方向から検討していかなければならないようだ。又先生の云う、個人としての自立ということとは、意識改革と行動が伴わなければ出来そうにもないので、これからさき時間をかけ、無理をせず、旧知の友のように付き合っていきたいと思う。

最後にこの講演から、現在—過去—未来—と一環して、人生観から死生観までを思索する、という機会を与えられたことに感謝して、ペンを置く。

要約 渡辺亮子（国九）

英II部の方々

「秘書」

英文II 伊與木順子

女子短期大学で秘書実務の授業を担当しています。実社会の経験を買われて、この責任重大なお役目をいただいたのが三年前です。二十数年間、アメリカ資本のいくつかの組織で働き、タイピスト、通訳、秘書、速記者、重役秘書、管理補佐、そして畜産技術翻訳家としての道を辿りました。

まだ、今の様に、秘書養成の学校のようなものは無い時代でしたが、とにかく、高校を出ると、昼間は働き、それと平行して、夜はあちこちの学校に通いました。今になって思うと、昼間は仕事で実務 (Practice) を、夜は学校で教養と専門の学問 (theory) を見につけて、徐々に知識、技術、人間性を高めることが出来たお陰で、曲がりなりにも、この道を辿る事が出来たのだと思います。関東学院短期大学英文科第二部は、その道の記念すべき大出发点であったことに気付いたのは、つい最近のことです。

私が辿った職業も、ポードアレスの時代、グローバル化の時代、OA化の時代、情報化の時代、などと言われる最近の経済社会情勢

に、良きにつけ、悪しきにつけ、影響を受けて変化しています。私は秘書という職業の未来について、大きな期待をかけています。

労働市場の人手不足と、男女雇用機会均等法のお陰で、短大卒の女性達も、様々の企業から引っぱりだこですが、秘書については、経験がないため、また、日本ではまだ確立されていない職業であることから、彼女達が卒業と同時に、秘書になることは余りありません。しかし、彼女達が、立派な秘書として活躍出来る将来性は高いのです。

アメリカでは、ウーマンリブの台頭以来、秘書になりたい人が少なくなつたと聞きます。上司の補佐という、付属的職業のイメージが強いこともあるからです。一方、重役秘書や、管理補佐の職種は、需要が非常に高いそうです。ここに、矛盾があります。この高給の職業に就くまでには、いわゆる秘書の経験が必要だからです。

世界大戦後、まだ日本の社会では其の秘書が育たない中に、外国、特にアメリカ資本の組織の中で、優秀な日本人秘書が着々と育っていたのです。例えば、ある女性は、日本にいながらにしてアメリカ組織の中で、その異文化体験をしながら、日本語と英語を操って、

両国経済・法律・政治等を勉強して自分の組織の専門を身につけて、アメリカ人の上司と日本の関連組織との橋渡しの仕事もしてきたのです。そして、まだ女性の地位が低い日本のビジネス社会を尻目に、かなりの責任と権限を与えられていたのです。国際秘書と呼ぶのは、この人達からです。

目覚ましい日本経済の発展に伴って、多くの日本企業が今、地球ベースで活動しています。日本には、外国資本の企業や多国籍企業が、どんどん進出して来ました。こういう組織は、女性の持つ優れた能力を積極的に活用することの利点をよく知っています。ここに、この女性達の様な国際秘書の仕事をする人々の出番があり、もっともっと、その様な人々が必要となつて来たのです。

人手不足と、男女雇用機会均等法、女性の進出意欲、などから考えても、こういう秘書の存在価値は大きいのです。女性達はその潜在能力を十分持っている筈です。従来、いわゆる、欧米的秘書以上の知識と技術と人間性を備えた秘書が望まれます。今まで、上司たる人々が、経営や管理の責任者としての立場から行って来た仕事の一部を、秘書が、権限と責任において遂行する時が来ています。現

にすでに、そういう仕事に携わっている秘書がいます。こういう人々が、もともとっと、増えていいのです。

短大では、直ちにこういう人材の養成は無理です。しかし、過去の固定観念で考えずに、国際的に活躍する企業や他組織のボスたちの力となって実力を発揮出来る秘書を沢山育てたいと思いますし、育てたいと思います。女性達が社会への進出意欲を持って、忍耐強く、しかし自信を持って、無限の可能性を求めて進めば、社会も求めに応じてくれます。教育の立場からは、日本独自の国際秘書を多く生み出す基盤をどう整備するかが、これらの課題です。

「英文ワープロ」

どこまで使えるか

英文II 小林守信

一九八五年三月、北米コネチカット州コネチカット河のほとりにある水洗金具製造会社本社を訪問した。平家の建物の中の重役秘書室は、みんな日本製のプリンターのついたパソコンのワープロを一台ずつ持っているのに驚かされた。日本に帰って、早速自宅にワープロの使えるNECパソコンを求めた。英文

ワープロとしては、当時「ワード・スター」という米国製のソフトしか市場に無かったか、その虜になって、すでに五年たった。しばらく使っている内に、「ライト・ライター」という、英文のスタイル、文法などをチェックしてくれるソフトを入手した。これは全ての英文法の誤りを指摘してくれるのではないが大変役に立つ。そのソフトの中には、米国防省の兵器等のマニュアル作成基準に基づいた米国の大学でもおしえられている四千位のスタイル、チェック、ルールを持っている。米軍のマニュアルの読解力の要求は「高校卒業程度」をめざしているのは有名な話である。今、これらを利用して、私は英文原稿を作つてから、校正を繰り返して仕上げている。(両方ともMS-DOSというコンピュータ言語で作られている。)

原稿を「ライト・ライター」に移して、チェックを掛けると、このソフトはいろいろなコメントが付いてくる。

その際、一番気にしている事は、このソフトによる難易度、説得力、記述力の点数である。とくに説得力の点数を〇―の物差しで、〇・五以上に上げる事である。この点数は、相対的であるので、アメリカのいろいろな文

章(英文雑誌「タイム」を含めて)をこのソフトでチェックして貰って、この点数の意味を会得するしかない。

長年使ってみて、①二十三語までの単文で、②複文構造でなく、③不定語、④比較語を余り使わないと良いみだいである。

私の作文を米人の高校英語の教師の添削を受けたら、難易度が私のものより下がり、そのうい説得力を私のものよりかなり高くしてきたので、私はこのプログラムを借用している。

値段はアメリカなら、五〇ドル、日本なら一・九万円弱である。

現在やっているのは「ワード・スター」のプログラムでスベル、チェック(綴り)をして「ソーラス」(同義同辞典)で言い方を代えたりしている。

このあたりの作業は、基本ソフトに組み込まれているのでキーボードの、指先操作のみで訂正、置換操作ができる。

今一番頭を悩めているのは、「クリシエー(古くさい言いまわし)」と指摘されることである。

研究社英和大辞典で苦勞して前置詞まで、調べたのにもかかわらず、この指摘をうける

とどうして良いかわからなくなる。すなわち、この辺が改訂に時間のかかる日本語による英和大辞典の限界なのである。ソフトの指摘の方が多分現代米語として正しいのだと思う。先日、シングルスペースで二〇頁の英文報告書を作成した。凡そ二〇日ぐらい掛かり、五〇回ぐらい書き直したと思う。

もうこれはワープロでないとできない事であらう。

推稿をやればやるほど先が見えてきて、いまはまず、書きたい事柄の構想を決めて、最初からワープロで書く練習をしている。こうしないと説得力が上がらないみたいである。



合同同窓会報告

合同同窓会は、毎年一回、委員会をもち、香葉会から四名の代表幹事が出席して、オール関東の同窓会としての働きを協議しております。燦葉会支部として始まった県央支部は毎年秋に、厚木市で総会が開かれます。小田原キャンパスの開校に合わせ、昨年からは西湘支部も誕生しました。香葉会員もそれぞれの支部に加わり、委員も出ております。総会には香葉会の役員も出席しますので、各々の地区のお近くにお住みの方は、是非参加して下さいようお願いします。合同としては学校法人理事会との会合が年二度、持たれるようになりました。大きくなった同窓会が、学院の発展に少しでも貢献できる団体として、学校当局の方針や会への注文も伺い、当方の希望を聞いて戴き、相互理解を深める目的で始まったことです。回を重ねる毎に、風通しは少ずつ良くなってきていると思います。今年の合同の総会は、燦葉会から三〇名、香葉会、かんらん会、六葉会から各一〇名の代表幹事が出席して、六月二十八日、金沢八景の真鶴会館で、理事会の諸先生をご招待して、行われました。坂田記念館は、坂田先生ゆかりの品々が展示され、二〇人位の会議室もありま

す。是非お出かけのうえ、ご覧になって下さい。
(古城記)



「公開講座」へのお誘い

香葉会の皆さま御元氣ですか。今年度は皆さまの後輩になる新入生900余人が入学され、短大キャンパスは明るくはずんでいます。

短大がここ室木キャンパスに移転して10余年——チャペルや白い校舎を囲むオリヴ、アカシア、桜、楠などの樹々も漸く枝をのばし、四季折々の眺めも一段と風情を増してきました。さらに金沢八景駅からキャンパスに至る、平潟湾沿いの通学路、約800mも遊歩道に整備され、楽しい道のりになりました。もしかして最近の母校を御覧になっていらっしゃるのでは？…。

というところで、一番に参加して頂きたい皆さまに「公開講座」の御案内と、お誘いを致したいと存じます。

「公開講座」は本学の「生活文化研究所」の事業の一つとして、下田学長はじめとする研究所運営委員会で企画され、事務局職員の協力によって実施されています。

研究所は関東学院創立100周年記念事業の一環として、建学の精神に基づいて、学術・文化に寄与することを目的に、1984年（昭59）開設されました。「公開講座」のほかに、生活文化に関する学際的研究、学術講演の開催、研究紀要や年報の発行等々の事業が行われています。初代研究所長は前学長林淳三教授が兼任されました。

「公開講座」は研究所の発足当初から開催され、今年度は第8回目になります。

公開講座では、カリキュラムの講座を地域の人たちが自由に見聞できるように開放するという本来の意味があります。近年、各大学でも、開かれた大学のステータス・シンボルとして、生涯教育として、一定期間独自の趣向をこらして開催されています。

当研究所の公開講座では、急速なテンポで移り変わる今日の生活に対応して、人々の精神面、身体面、そして生活環境の確かな充実に必要と思われる知識を提供し、各自が思考の枠組みを広げて柔軟に活用され、生活文化のよりよい向上につながることをねらいとしています。

幸い本学には人文・社会・自然の各学問領域の先生方がおられ、専門分野の講義を勤めて下さいます。例年なかなか好評で、100名の募集人員のところ、はるか上まわる応募がありますが、約200名を限度に開講しております。一方、受講生の学習意欲も旺盛で、生活経験も豊かなせいか、鋭い質問などによって、いっそう講義内容も深められているようです。講座最終日の懇親パーティーは和やかな会話のひとつときます。

今年度の公開講座では、「女性と生活文化——Part 7、ニュー・エスティック・ライフのすすめ」のタイトルで、10月2日から毎週水曜の10回、13時30分～15時30分までを予定しています。なお具体的なことは下記へお問合わせ下さい。香葉会の皆さまの御参加をお待ちしています。

このたびは「香葉会誌」の貴重な1ページを御提供下さりまして、ありがとうございました。心より感謝いたします。

生活文化研究所長 山口和子

問合せ先 生活文化研究所 TEL 045 (787) 7844
入試広報課 TEL 045 (787) 7880

先生方の著書紹介

- A 所属(科)
- B 氏名
- C 著書名
- D 出版社名
- E 販売価格
- F メッセージ

香葉会会員の皆様も卒業して、何年～何10年と過ぎて、香葉会も21年たちました。若き日(青春時代)の1ページをすごした短大での思い出を……友人を……先生を……

香葉20号の記念号にあたり、最近の先生方の著書の紹介をしたいと思います。専門書あり、小説あり、先生をなつかしく思い出すものもあるでしょう。書店で1度は手に取って見て下さい。そして……お買い求めを……。

“人生、よく遊べ、よく学べ”

- B 相川高秋
- C Unwilling Patriot
(関東学院と戦争)
- D ヨルダン社 (1960年)
- E \$2.00 (絶版)
- F 上述のものは外国向で、もう残本はありません。最近のものは「わが恵み汝に足れり」ヨルダン社 1,500円ですが、之もヨルダン社では絶版。但し私の手許には100冊程残っています。御希望があれば、送料込み1,500円でお送りします。之は関東学院の歴史です。

- B 柳生直行
- C お伽の国の神学
- C. S. ルイスの人と作品—
- D 新教出版社
- E 3,500円
- F 本書あとがきより、「正直言って、私はルイスに出逢ったことをわが生涯の最高の祝福の一つと考えています。というのは、彼の学問と信仰が私の理想と考えているものになりたいへん近いんです」

ちょっと読むのに根気のいる本ですが、本人が生前にライフ・ワークとして纏めたものですので「お伽の国の神学」にいたしました。(柳生二三)

- B 兵藤正之助
- C わが昭和の青春
- D 春秋社 E 2,300円
- F 1919年生れのぼくの戦前戦中戦後70年余のうち最も波瀾の多かった青春のある時あることを求められるままに書いたエッセイ集。従って恥かしきこと多し。もちろん中にはかって胸ときめかして行った短大にはじめて勤めた折のこともふくまれている。はて、そのさまは、いかがにや。

- A 家政科 B 林 淳三
- C 食生活論
- D 建帛社 E 1,300円
- F 食生活論は食品栄養関係学問を食生活として包括したもので、本校では7、8年前から家政科全体に必須科目となっている。厚生省でも1987年度より栄養士養成課程に入れられた。しかし確立されていないので本書で試案を作成し、その学問化の可能性を模索中、また全国的研究会も発足させた。

- A 国文科 B 岡松和夫
- C 一休伝説
- D 講談社 E 1,500円
- F 一休さんの本当の姿を書いてみようとした歴史小説です。



久

- A 英文科 B 宮川喜代江
- C Basic 時事英語辞典
(共著)
- D 三修社 E 2,500円
- F このところ、世界は目まぐるしく変動しています。衛星放送でイギリスからのBBC、アメリカからのCNN等、なまの英語が飛び込んできます。Asahi WeeklyとかThe Student Times等のやさしい英字新聞からスタートなさる方に向いた辞書かと思われま。長い一生、いつも何かに取り組んでいて下さい。

- A 一般教養 B 矢嶋道文
C 日本の経済思想四百年
(杉原四郎他編)
D 日本経済評論社
E 3,605円

F 卒業生の皆さん、お元気ですか？文化史・思想史(生活文化史・国史)の矢嶋です。このほど私の所属する「日本経済思想史研究会」のメンバーで、一冊の史料集を出しました。

私の担当は江戸時代(近世)で、相変わらず「日本の重商主義思想」を書いています。当年43歳になりましたが、ますますハリキっていますので、皆さんも頑張ってください！

- A 英文科 B 井上裕子
C ギュスターヴ・グーダロー
「佛蘭西人の駆けある記
一横浜より上信越へ」
D まほろび書房
E 1,980円

F 1886年夏、横浜在住のフランス人がコレラ禍の首都圏を逃れて、開通したばかりの鉄道、馬車、カゴ、人力車など蒸気船などを使って、東京―新潟―直江津―長野―軽井沢を旅行した時の見聞記、当時の交通事情をはじめ明治初期の日本の状態特に外国人から見た印象などが興味深い。

- A 経営情報科
B 板垣 綴
C 人間の精神活動としての新・経営学
D (株)税務経理協会
E 1,200円(消費税別)

F 経営学がわが国で、学問としての市民権を得たのは1925(大正14年)で経済学とも商業学とも異なる社会科学です。

自然科学のような仮説・実験・証明という方法をとりませんので、「人間の精神活動」にこだわった題名にしました。

私は「社会現象としての人間の意思決定行動」を主テーマにしています。

- A 家政科 B 吉田 博
C きのこの基礎科学と最新技術
D 農村文化社
E 8,000円

F 10月頃発刊予定です。専門書ですのであまり皆様にはお役にたたないと思いますが。



- A 幼児教育科 B 丸山昭一
C 幼児の創造性を伸ばすために
一新幼児教育と造型学一
D 和広出版株式会社
E 2,266円

F 常日頃、身の回りに目を向けた時、簡単に捨ててしまうような廃物の中にも何かに生かされることができると知り、物を大切にすることが育てられていきます。親子で作りがら心の交流もでき、子どもの豊かな創造性も伸ばすことかつ、やさしいものから導入していく本として作りました。

- A 家政科 B 倉沢新一
C 食品加工実習書
(菅原龍幸編)
倉沢新一他編
D 建帛社 E 1,800円

F 食品加工実習の教科書として書いたものですが、加工食品の成り立ちや、特徴それに食品化学的な項目がわかりやすく書いてあります。身近にあふれている加工食品を理解する助けとして。あるいは、手づくり食品に挑戦する時の助けとしてご利用されてはいかがでしょう。

- A 国文科 B 高橋敏夫
C 文学のマイクロポリティックス
D れんが書房新社
E 2,300円

F 「マイクロポリティックス」とは「見えない政治・小さな政治」といったほどの意味です。「大きな政治」が消えた現在、わたしたちを動かしている官業・イメージの政治を、文学・思想・民俗のなかからあぶりだす試みを集めた評論集。本人だから断言しますが、良書です。

- A 一般教養
B 三枝源一郎
C 師範教育120年のあゆみ
D 日本教育新聞社出版局
E 5,500円

F 旧制師範教育を受けた2,200人の執筆による個人のあゆみと、各期の時代・社会の動向との関係、特色ある教育者の紹介等。

「香葉」誌と同じく、同窓会事業として編集したものであるから、ここに挙げた。編集代表・責任者。

- A 英文科
B Shannon Olmstead
C Shiokari Pass
D OMS(Overseas Missionary Fellowship)

F A work of non-fiction that chronicles the life of a man dedicated to god. This book is moving, inspiring and challenging and teaches about life in a thought provoking way.

千葉義孝先生追悼

岡 松 和 夫



国文科教授の千葉義孝先生が、平成二年六月三日午前五時二十九分、悪性リンパ腫のため、杏雲堂病院（東京都千代田区神田駿河台）で亡くなられました。四十六歳でした。

先生は昭和五十二年四月に本学国文科の専任講師となり、昭和六十二年には教授とられました。国文科としては、私が将来バトン・タッチして、国文科の中心になって頂くことを考えていた方で、大きな痛手です。

先生は昭和十八年十一月生まれで、昭和四十一年三月に日本大学文理学部国文学科を卒業され、一年間専攻科に学ばれた後、高校教諭の職を経験されています。国文科としては、新しく迎える先生については研究業績が十分であることは勿論、教諭の経験を重く見ます。その点で申し分ない方でした。私は、学生たちの指導については同僚と歩調を合せることなどは二の次にして、自分の思う通りにやって下さいと最初にお願いしましたが、学生たちへの親身な指導ぶりは予想をはるかに超えていて、よく敬服させられました。これは千葉先生の教えを受けた人たちが一致して認める点だと思えます。国文科の内部だけではありません。先生はスポーツ好きで、学生たちのクラブの指導もされましたから先生は全学的によく知られた存在でした。

私は授業を済ませると早く学校を離れるのですが、先生は夕方まで

で国文演習室で発表準備の学生の相談にのったり、体育館でクラブ活動の学生の相手をしたりで、東京の御自宅へのお帰りは相当に遅かったと聞いています。

健康への自信は相当なものだったと思います。それだけに、先生自身長い入院を悔しく思っておられたと思います。先生の入院闘病は昭和六十三年十二月初めから始まり、途中短い退院はあっても結局亡くなられるまで続きました。

研究業績については最後にリストを挙げるつもりですが一応概観的に述べますと、先生は平安期の和歌の研究者です。本学の専任講師となられる時の論文審査は、山下登喜子教授（故人）と私がしました。先生の研究は平安期の和歌史のなかのマイナー・ポエツトと言ってよい歌人たちの伝記や歌集の研究でした。

とりわけ「藤原範永試論——和歌六人党をめぐって——」（昭45・8『国語と国文学』）、「藤原家経雑考」（昭47・3『語文』37集）など、先生の綿密な伝記研究に深い興味をそられました。

本学の専任者となられてからの研究は幅が広くなり、深まり、亡くなられる前には、すでに自分の研究をまとめて本にするつもりもあつたらしく、それが御遺族の骨折で刊行された『後拾遺時代歌人の研究』（平成3・6 勉誠社）です。

この本には、先生の結婚の時の媒酌人で日本大学文理学部国文学科の有吉保教授の「あとがき」があつて、先生のエピソードが紹介されているので、それを少し紹介させて頂くことにします。

「著者は、高校時代の東京オリンピックの際、府中市内の聖火の伴送ランナーとして走っている。水泳の選手として活躍したほか、スポーツ万能選手であったかのようである。母校の教師として水泳

のコーチにも熱中したようであり、聖火ランナーの経験は国文学研究者としては珍しい経歴であろう。」

確かに国文学研究者としては珍しい経歴で、私はこういう話を千葉先生から直接聞いたことがないので、スポーツ好きの千葉先生の面目躍如という感じがしました。

私が聞いたことをここで加えますと、学生時代に船でブラジルまで蝶採集に出かけられたということですから、こういうことも国文学研究者としては珍しい経歴でしょう。

玩物喪志（珍奇なものを愛玩して大切な志を失うこと——と『広辞苑』は解説しています）という志向が国文学者の一つの方向であるとする、千葉先生はその正反対で、いつも意欲的で、節度ある態度を守ったのが先生だと思っています。

先生の冥福を祈りつつ、左に先生の主要な業績を記載します。

〔遺著〕

『後拾遺時代歌人の研究』（平成三年六月 勉誠社）

（内容を紹介します）

第一部 後拾遺時代歌人の研究

一 藤原範永試論——和歌六人党をめぐって——

二 藤原範永の家集とその周辺——家集から知られる交友関係を中

心に——

三 藤原家経雑考

四 藤原家経年譜考証

五 校本『家経朝臣集』と家経歌拾遺

六 『藤原家経朝臣集』の伝本に関する研究

七 源頼実とその家集

八 加賀成助研究ノート——その1 資料篇——

九 忠命法橋伝考——平安期の一歌僧の生涯——

第二部 後拾遺集とその周辺に関する研究

一 『後拾遺和歌集』巻第九「羈旅」歌私注(一)

二 『後拾遺和歌集』巻第九「羈旅」歌私注(二)

三 『後拾遺和歌集』巻第九「羈旅」歌私注(三)

四 北村季吟の八代集注釈作業——『後拾遺和歌集』の場合——

五 津守和歌集——翻刻と紹介——

〔共同執筆〕

『千載和歌集の基礎的研究』（有吉保編。昭51・3 笠間書院）

『和歌文学辞典』（有吉保編。昭57・5 桜楓荘）

『新編国歌大観 第3編』（昭60・5 角川書店）

『和歌大辞典』（昭61・3 明治書院）

『新編国歌大観 第5編』（昭62・4 角川書店）

『新編国歌大観 第6編』（昭63・4 角川書店）

『日本名歌集成』（昭63・11 学燈社）

クラス会報告

とき 90・10・

18(木)

19

(金)

一泊

快晴

ところ 恵みシャ

レー軽

井沢

雲場の

池の畔

さんか 九名

一日目



七年振りにクラス会を開きました。三時過ぎ、部屋割を済ませ散策へ。紅葉の雲場の池を一巡し、旧軽井沢別荘地を抜けて、聖パウロ教会へ。夕暮れの旧軽銀座をウインドーショッピング。

五時半 夕食。こけももジュースで乾杯。六時半～八時半 ロビーにて歓談。参加出来なかった方々の消息を語り合いました。各自の部屋へ戻り、夜中二時頃迄おしゃべりがはずんだようです。二人一部屋、バス

トイレ付、暖房完備、毛布一枚で充分暖かでした。

二日目

八時半 朝食。手造りのパン、ドーナツ、ソーセージ、サラダ、エッグ、リンゴ、ミルク、コーヒー、カナダ産ジャム。

九時半 観光ハイヤー二台に分乗、別荘地旧三笠ホテル、鹿島の森ロッジを経て白糸の滝へ。峰の茶屋を通り秋空にくっきりと雄姿を表わす浅間山を左手に仰ぎながら鬼押し出迄快適ドライブ。一時間余り散策し、11時45分下山。

帰路は、八ヶ岳連峰、北アルプス連峰を遙かに望める見晴台に立寄り、旧グリーンホテル、千ヶ滝西武、中軽井沢、中学校前を経て軽井沢駅へと戻りました。

駅前の手打そばやで昼食。散会。解散後、又々、旧軽銀座でショッピングなど、夕方迄ゆっくり楽しまれた方もありました。

何よりも晴天に恵まれ、自然の雄大さ美しさに感激を新たに、旧交を温める事が出来ましたことを心から感謝しております。

(短英三三) 永島(高田) 興子

クラス会記

一年置きにク

ラス会を持っておりませんが、今回初めて一泊旅行を計画して見ました。子育ても終りそろそろ孫の話も出る年令となり、一泊位の時間の余裕は持てるのではないかと考えたのです。が、お

年寄を抱えていたり、自分の身体の不調があったりと、又現在も現役で社会で活躍なさっているとかの理由で参加人数が予想より少なく、少々がっかりしました。

時は十月二十九日、所は伊東温泉「いづみ荘」松風呂、銘石風呂、更に流行の露天風呂等、思い思いに旅の疲れをいやした後、楽しみな夕食は、手のこんだ懐石料理しばし日常を忘れて舌づつみを打ちました。

秋の夜長は学生時代の思い出話にお腹をよじって笑ったり、又今迄歩んで来た人生のつ



まずきや苦勞話を胸襟を開いて話し、夜の更けるのも忘れませんでした。お互いの体験談には学ぶ所が多く、これからの生き方に大きな指針を与えて頂きました。

今回のクラス会は、出席者こそ少なかつたけれど得たものは多く、又機会があったら続けて行きたいと思っております。その時は参加して下さる方が一人でも増えますことを期待して報告とさせていただきます。

(短英三) 浅倉(石井)美佐子

クラス会だより

季節はずれの、

記録的な台風が関東地方に上陸した日が、私たちのクラス会の当日と見事に重なってしまいました。

四年半ぶりのクラス会だといふのに、幹事の精進の悪さがたまったのか、と天を仰ぐ。歩く



のもままならない吹き降りのなかを、完全武装、水もしたたる？懐かしい笑顔が集い感動する。鮑さんのご実家、中華街の順海閣で、兵藤先生を囲んで十二人。

きよりのクラス会は、私たちの卒業に遅れること三十余年、兵藤先生がつつがなく？ご卒業という定年を迎えられたお祝いを兼ねた集いの会である。

先生の近著「川端康成論」。「わが昭和の青春」を肴にして、芳紀まさに三十代の頃の先生の先生ぶりに爆笑したり、試験の時お互いにノートを見せ合う約束だったのに、あなたはとうとう見せてくれず、私は白紙を出すはめになった、と昔のツケをまわしてのウラミ節に、云われたご当人は、覚えてない、どう仕様と昨日のことのような困惑ぶりに、又一同大笑い。

床の抜けそうな教室での二年間の友垣、でもそれ丈に友情は固く、旧姓で呼び合うのも気持ち若やく一日だった。

(短英八) 村上(高梨)節子

四十年目の初クラス会

三月二日、小

林守信さんの呼びかけで、短大

英II、一回生のクラス会が石田宅であった。集まった方々は、

小滝奎子先生、
上市二郎先生に、
小林守信、中村八朗、平井四方子、青木昭次郎、
伊與木順子、門

井正弘、鈴木利治、高瀬安雄の皆様と石田道博、石田幸子の十二名。

その日、一番にお見えになったのが上市先生。先生のお顔を拝見した途端、私は四十年の歳月を一挙に遡り、当時の学生に逆もどり。これには我ながらびびくりした。出席日数が足りない位と単位がとれないということ、毎晩せつせと通ったことや、皆さんが英語が優秀で、小さくなりっぱなしだったことなどを、一瞬のうちに思い出したのだ。

卒業後、始めてお逢いした方々が殆どで、



自己紹介があった。私達は昼間働いて、夜勉強したのであったが、卒業後、更に大学や大学院にいかれたり、留学されたりと、皆さんそれぞれに立派な経歴をお持ちで、深く感じ入った。小滝先生が名前を覚えて下さったのは、思いがけなくうれしいことであった。久しぶりにお逢いした平井さんとは、その後、お電話でお話しするようになったし、在学中、お話しする折りのなかつた伊與木さんとは、このあとお逢いするようになった。皆様にお目にかかれましたのを感じてお喜びます。

遠方の先生まっ先にご到着四十年目の初クラス会

英文学の小滝先生にこやかに若き日のままきませりクラス会

自己紹介すれば覚えていきますよと先生は旧姓で呼んで下さる

四十年ぶり逢える級友の経歴の皆立派なり畏まり聞く

それぞれに欧米の留学語りあう先生、友らの若々しきもよ

(短英II一) 石田(石塚)幸子

五月会ニュース

短大二回卒

生の同期会、

さつき会が、

今年は五月十

九日、関内の

つきじ「植む

ら」で開催さ

れた。なつか

しい十四名の

友が集い、懐

石料理をいた

だきながら、

話の花が咲き、

賑やかな一時を楽しんだ。

そのあと三春台迄、散策旁々、母校を訪れてみようということになり、吉屋さんの御力で新設の坂田記念館も併せて拝観出来ることになった。日曜日は休館日であったのに、

坂田創先生が、わざわざお待ち下さって御案内下さり、一同、感謝感激！館内は坂田先生の生涯の遺品や遺影が、数々、展示されて居り、それぞれに先生の遺徳を忍びつつ、ゆっ

くり拝見させていただいた。

三春台の旧短大校舎は木造校舎は勿論のこ



五月会坂田記念館

と、当時超モダンと思われたグリセット記念講堂もとり払われて今はなく、わずかに、鉄筋のふるびた建物が一部残っていただけだった。それでも地下室のパン屋の想い出、二階の窓から投げたカパンが地下との溝に落ちてしまった話など、瞬時、誰もが学生時代に戻って、とても楽しそうだった。

来年は還暦！皆様と盛大な会をと願ってやまない。

(短英二) 丸山(秋葉) るみ子

ツースコア後の再会

三月二日、横

浜本牧広小港の

石田ご夫妻の新

築アトリエをお

借りして、夢

の饗宴は実現

しました。数年

前までは米軍用

地として接収さ

れていた、その

面影も止めぬ野

原の一角。この

場所からして今



昔の感無了でした。

木の香も新しい部屋の中央は、お内裏様にも比すべくお若い小滝・上市両先生。お二人を囲むシルバーの人の輪、紳士は五人囃子・左右大臣（青木・石田・角井・小林・鈴木・高瀬・中村）の七名と三人官女（石田・伊與木さんと私）。四肢不自由の私はお二人にすっかりお世話になってしまいました。

各自頭に白いものがちらく以外は、容姿、癖、声など全く昔と同じ。四十年前、泉初の夜間文科系講座の開校に、戦時中の遅れをとり戻すべく集まり来たった好学青年たち。なかには昼間働いて親弟妹を養っていた人も多く、互いに励まし合い、未来を語り合った、なつかしい仲間なのでした。

今は業成り名遂げた停年退職者。特技や趣味経験を生かして第二の人生を歩みはじめて意気軒昂。語るその後の人生はエピソードに満ちみちていたのは無論ですが、夜間短大というハンディにも拘わらず、大学、大学院へ進み、或いは内外地留学を果した人の多いのにはびっくり。また、学生に劣らず貧弱だった学院の会計。今だから話せる。秘話も両先生から伺いました。

卒業後四十年の空間を飛び交うQ&Aは止

まるるところを知らず、異才怪才の多かった朋友の噂や、今は亡き諸先生のご冥福を祈りつつの散会でした。

若き日の私自身を思い出し、また今、まああたりに鑿鑿とした仲間老青年の息吹きに触れ、昨今落ち込みがちの私にも、不意に若さと勇氣の戻ってきた貴重なひとときでした。

その上、小滝先生のみが現役で生徒全員がリタイヤ、という不思議な会でもありました。

（短英Ⅱ一）平井四方子

「めだかの会」

七月七日奇しくも七夕の日、

私達国文科七回

卒業生の集い

「めだかの会」

が鎌倉「吉亭」

にて開かれまし

た。今回は岡松

先生の還暦のお

祝いも兼ねており、大変おめでたい会となりました。



早いもので学舎を卒業してから十四年の年月が過ぎてしまいました。青春の真っ直中から結婚、子育て、或いは職業婦人として、皆さんお忙しい中にも充実感が漲った毎日をお過ごしのようにです。懐かしい岡松先生はお元気な様子で、私達が教えを請うた先生方のご近況などお話し下さいました。それぞれ色々な思い出に心を巡らせたことでしょう。

いつも変わることなくご健健でご誠実な先生に私達は見守られているのだと思いました。先生、いつまでもお元気で活躍なさって下さい。

長い人生のうちの僅か二年間でしたが、よき師よき友に恵まれ、実りの多い日々を過ごしてきたのだと思えました。そして、一日一日を大切に生き、美しく年輪を重ねていききたいものです。

夏木立ちの美しい古都鎌倉で、懐かしく楽しい時を過ごした一日でした。

（短国七）岡崎（石渡）敬子

幼児教育科Aクラス、十年ぶりのクラス会

昭和五十五年卒業、幼児教育科Aのクラス会を平成二年十二月一日に行いました。

十年ぶりという再会を皆で喜びあい、近況

や思い出話に賑やかな話の花が咲きました。中田先生もご出席下さり、クラス名簿を覚えていらして、番号順に出席をとって下さった時には、楽しかった幼児体育の授業、ピアノやレポートで苦労した学生



時代が懐かしく思い出されて胸がいっぱいになりました。次回はより多くの方とお会いできることを願っています。

(短幼六) 伊藤(平山) 浩美

古屋(樋口) 由美子

〈同寮会〉

短大を卒業し、十二年ぶりに田中寮母さんと寮の仲間十五名と、横浜中華街にて再会する事ができました。

朝一番の飛行機に乗り、帰りは最終便の日帰りの中にもみんなに会いたいという思いで

こられた方、夜行のバスに乗り一夜かけて出席してくださいました。子供さんの方、子供さんをお母さんに頼み電車に飛び乗った人、ほんとうにうれしく思います。皆さん、あの頃の寮母さん、友達に会える一心で会場に出席してくれました。



ですから、もちろん一目見るなり、十二年の歳月が空白になり、当時の寮生に早変わりです。「かわつてないね」「会えてうれしいね」「元氣!」子供がいる母親の顔ではなく、その日だけは、二十才の学生、寮生の顔で楽しく過ごす事ができました。

一の寮内から、それぞれの道を歩んでいった人達ばかり、それも北は北海道から、南は広島まで、それぞれの土地でそれぞれの生活をしている人達が、また一つになれたという事はすばらしい事で掛替えない友達、宝だ

と思いました。

次回も、今回おいでになれなかった方々も御一緒にお会いできればと思っております。

(短国十三) 大野(高橋) 恵子



県央のつどい

『香葉』十号に載せて頂いた拙文の効果や如何にと期待に胸ふくらませて迎えた。県央の集い、十周年でした。十一月十七日、厚木ロイヤルパークホテル、午後五時続々と運び込まれる楽器と若々しいブラスバンドのメンバーの熱気に今日の盛会を予想し会場準備に走り回ったものでした。会場も例年の倍の広さが用意され大学のブラスバンドのフルメンバーでの演奏が企画されました。出足は？―思い込みが激しかったので：一寸外れました。香葉会懇談会は？―殆ど毎年ご出席下さっていた古城会長のご出席は叶いませんでしたが相吉副会長を始め『香葉』編集長の葛城さん、井上さん、洲上さん等のご出席を頂き又年度委員の佐藤さんご紹介の松上さんも初参加、この様にどんだん輪が広がると思います。小人数ながら和気合い合いの懇談会でした。演奏は？―若さ溢れるメンバーは先輩達の御前演奏とあって熱演、ホテルで聞くブラスバンド演奏も迫力があってなかなか良いものです。動員数はやや欠けましたが全体に落ち着いた家庭的な会であったと思います。『十年』という大きな節目を過ぎ又十一年に向けて歩き始めました。県央支部は燦葉会と香葉会との

コミュニケーションが非常に良いと他支部からも注目されているとの事、この会が卒業生の交流の場として『線』で続くようにと願っています。今年も十一月に予定しております。どなたでも気楽に楽しんで頂けるそんな会です。是非一度お出掛け下さい。



短大インデックス

香葉20号。香葉会としての歩みも20年という月日が流れました。

卒業生も17,000人を突破し、毎年一1,000近い卒業生が香葉会の仲間入りをしてきています。ここで20年の節目として、各科の状況をお伝えします。学生時代を思い出してみてください。

-

学長 下田 哲 教授 キリスト教概論のキリリ!とした授業は不滅です。

英 文 科 1年生 238名 5クラス 2年生 202名 5クラス
専任の先生方 科長 宮川喜代江教授
加藤紀子教授、小玉敏子教授、徳永透教授、大谷立美助教授、立花桂助教授、A. Van Buren助教授、宍柳明講師、L. Turley講師

教 務 職 員 新海浜子さん、村上恭子さん、池田桂子さん
学科誌として『Campas』を毎年度末に発行。今年度22号になります。

国 文 科 1年生 205名 4クラス 2年生 175名 4クラス
専任の先生方 科長 岡松和夫教授
岩佐壮四郎教授、川崎宏教授、岸正尚助教授、伊東光浩講師、篠崎貞子講師、高橋敏夫講師、牧野ひろ子講師

教 務 職 員 佐藤庸子さん
学科誌として『平 渦』今年度24号を12月頃発行予定。卒業生と在校生、学校をつなぐパイプとしても活躍しています。

家 政 科 家 政 専 攻 1年生 95名 2クラス 2年生 99名 2クラス
生活文化専攻 1年生 108名 2クラス 2年生 97名 2クラス
食物栄養専攻 1年生 88名 2クラス 2年生 96名 2クラス
専任の先生方 科長 和田淑子教授

手嶋登志子教授、林淳三教授、山口和子教授、吉田博教授、渡辺紀子教授、赤羽ひろ助教授、倉沢新一助教授、藤本憲太郎教授、新井信一講師、佐々木昭子講師、山田哲雄講師

教 務 職 員 金田晴美さん、福永千織さん、徳野麻有美さん、佐々木まどかさん、勝島智子さん、引地由佳里さん、宗方弘子さん、小林正枝さん、中谷郁子さん

学科誌として『室 木』を発行。今年は年度末の3月に発行の予定。

幼 児 教 育 科 1年生 138名 3クラス 2年生 135名 4クラス
専任の先生方 科長 中田弘良教授
朝倉隆夫教授、犬木瑛子教授、真坂孝二教授、丸山昭一教授、村上顕教授、安東裕躬助教授、菊池美恵子助教授、小室康平助教授、佐々木昭子講師

教 務 職 員 今江るみさん、森山美季さん、伊藤智子さん
学科誌として『あんふあん』（フランス語で幼児の意味）を年度末に発行の予定。創刊は1981年です。

経 営 情 報 科 1年生 125名 3クラス 2年生 62名 2クラス
専任の先生方 科長 井口 伸教授
板垣毅教授、鈴木登紀男教授、山下輝彦教授、金子義幸助教授、小林進助教授、山中義昭助教授、M. ビグデン講師、渡邊利夫講師

演 習 室 金子美穂さん、教務職員 金井辰子さん
本年3月、卒業生は第3回生となりました。

一般教養の先生方は主任 下田 哲教授、
伊福部舜児教授、太田安定教授、笠原久弥教授、三枝源一郎教授、田山美智子教授、大越公平助教授、矢嶋道文助教授、井上裕子講師、吉見富美子講師

皆さんとても若々しくお元気です。(先生方は50音順に記載させていただきました。)

母校ニュース

▽新任教職員紹介



高橋 敏夫先生

国文科講師

早稲田大学卒業

国文学特論他担当



金井 辰子さん

経営情報科教務職員

員

経営情報科平成二

年度卒業



中谷 郁子さん

家政科教務職員

家政科食物栄養専

攻

平成二年度卒業



竹内 照美さん

就職課

国文科平成元年度

卒業



竹嶋 真樹子さん

教務課

家政科食物栄養専

攻

平成二年度卒業

▽短大卒業生に『準学士』の称号付与

学校教育法の法令改正により、「第二項の大学（短大）を卒業した者は準学士と称することができ」と規定され、今年七月一日以降の卒業生には『準学士』が付与されることになりました。さらにこの法律が施行となった本年七月一日前に短大を卒業した者についても、同じく『準学士』と称することができると明示されました。

1992年度入学試験日程

試験区分	出願期間	学科	試験日
推薦入学試験	〔郵送出願〕 1991年11月7日(木)～11月20日(水)必着 〔窓口出願〕 1991年11月19日(火)と11月20日(水)のみ	全 学 科	11月23日(土)
一般入学試験	〔郵送出願〕 1991年1月16日(木)～2月5日(水)必着 〔窓口出願〕 1992年2月4日(火)と2月5日(水)のみ	英 文 科 幼 児 教 育 科 家 政 科 家 政 専 攻	2月8日(土)
		国 文 科 経 営 情 報 科 家 政 科 生 活 文 化 専 攻 食 物 栄 養 専 攻	2月9日(日)

賛助金をご寄付

くださった方へのお礼とお願ひ

今年も後記の方々から総額「六十一万八千六百円」をお送り頂き、厚く御礼申し上げます。諸物価の値上げにより、年々「香葉」の発行がむずかしくなっております。また、卒業生唯一の雑誌をなくしたくないと、編集員一同がんばっておりますので、今後共賛助金の御協力をよろしくお願い致します。

一九九十年度賛助金寄付者(敬称略)

後藤美和子	中村智子	石井明美	森 禎子	吉田美津子	小林成子	タハ 茜	米野理愛	曾我かおる	漆畑晴枝	井上秀子	小林守宿
高橋美佐子	須山和子	古郡綾子	角津恵子	田丸瑠実子	菊地和子	野口信子	玉木宮子	川端乃利子	内田駒子	田牧洋子	栗林芳恵
芦部九女夫	矢萩千里	千田節男	田中輝子	横部久仁子	山地章子	斉田実子	荒木美絵	宇田川淑子	押野澄子	原嶋隴子	杉浦睦子
飯塚まり子	鈴木廻子	森田喜英	森田厚子	高橋みどり	大平千春	勝原明美	松本房子	押田富士子	濱田律子	佐藤治子	
森野恵理子	三村向子	笠木茂伸	中里玲子	小出美智代	藤沢弘子	笹谷弥栄	加藤裕子	中嶋貴美子	吉本いずみ	三野宮恭子	
佐々木晶美	中根悦子	宮沢常子	天野京子	岡部安耶子	坂本祐子	三沢葉子	遠田順子	小林寿恵子	鹿島よし子	鈴木恵美子	
松浦きぬ江	保川智子	前納順子	根本道子	新福裕美子	菅野晃子	藤井恵子	河原篤代	長谷川不二恵	馬屋原有利子	匿名一名	
大谷嘉旬子	月本鈴子	松田良子	梁島庸子	柴田美智子	田中晴子	出榮美子	原 淑子	富田直子	澄谷亮子	長田明子	吉田千恵子
齊藤恵美子	土山 忠	川島久里	根本 京	岩野由美子	作山智子	飯島敏子	吾妻彩子	山口周子	古城房子	相吉典子	
三代川典子	木村燐子	藪内和子	田辺和子	関谷由利子	小野ふみ	荒井静子	武田京子				
渋谷三千代	徐多恵子	西尾知花	堺 典子	石井多恵子	斉藤節子	渡辺冴子	岸本有加				
				上川奈緒子	鈴木京子	鶴見智子	岩田洋子				
								浅合美佐子	横田陽子	原 央子	葛城容子
								板場未央子	内海夏子	川添洋子	佐藤洋子
								藤田やす子	保科恭子	高橋秀子	石渡朝子
								後藤美和子	葦登喜子	鈴木光代	久保弘子
								八木恵津子	島田郷子	田中久恵	志賀ミチ
								斎藤理恵子	安彦潤子	小林 麗	中西愛子
								後藤裕美子	柳生二三	吉屋保子	辰沼滋子
								田辺美紗子	花岡淳子	内山紀子	相原梅子
								八木智恵子	飯吉玲子	雨宮慶子	益 昌子
								井上多恵子	鈴木久恵	小田牧子	渊上龍美
								馬屋原麻里	細野清美	吉田朝子	吉田洋子
								山口はるみ	伊藤明乃	水越幸子	伊藤章子
								福岡世紀子	海渡明子	佐藤久子	村上節子

平成 2 年 度 決 算				平成 3 年度予算
収 入 の 部	予 算	決 算	増 減	予 算
会 費	(@13,000×853) 11,089,000	11,089,000	0	(@18,000×884) 15,912,000
賛 助 金	500,000	644,600	△ 144,600	500,000
預 金 利 息	10,000	76,869	△ 66,869	10,000
雑 収 入	5,000	2,000	3,000	5,000
前 年 度 繰 越 金	1,930,870	1,930,870	0	2,364,580
合 計	13,534,870	13,743,339	△ 208,469	18,791,580
支 出 の 部	予 算	決 算	増 減	予 算
通 信 費	2,300,000	1,927,666	372,334	3,200,000
印 刷 ・ 製 本 費	1,500,000	1,392,147	107,853	2,800,000
総 会 ・ 会 合 費	2,000,000	966,054	1,033,946	2,150,000
交 通 費	500,000	303,800	196,200	500,000
用 品 費	100,000	153,776	△ 53,776	150,000
備 品 費	70,000	25,733	44,267	50,000
委 託 費	50,000	0	50,000	700,000
謝 礼 費	350,000	315,665	34,335	350,000
消 耗 品 費	50,000	12,604	37,396	50,000
人 件 費	1,600,000	1,458,850	141,150	1,600,000
合同同窓会分担金	(@300×853) 255,900	255,900	0	(@300×884) 265,200
新 入 会 員 歓 迎 費	1,300,000	1,186,560	113,440	1,400,000
名 簿 発 行 準 備 金	2,450,000	2,450,000	0	3,000,000
特 別 会 計	500,000	500,000	0	2,000,000
慶 弔 費	300,000	226,462	73,538	400,000
予 備 費	150,000	189,520	△ 39,520	150,000
雑 費	58,970	14,022	44,948	26,380
(小 計)	13,534,870	11,378,759	2,156,111	18,791,580
次 年 度 繰 越 金	0	2,364,580	△ 2,364,580	0
合 計	13,534,870	13,743,339	△ 208,469	18,791,580

香葉会に愛の灯を!!

香葉会も皆様のご協力により年々発展を続け今回は記念号として20号を発行することができます。それにつきましても諸物価の高騰により香葉の発行並びに香葉会の運営が大変むずかしくなっており、役員一同懸命の努力をしております。どうぞ会員の皆様から、なにがしかの賛助金のご寄付をいたゞきたく伏してお願い申し上げます。たとえ一円のお金でも一億人集まればの気持で会員の皆様の愛の灯が香葉会にとりましますように。

新名簿発行についてのお願い!!

平成5年を目標に又新しい名簿発行の準備に入りました。住所変更、お名前の変更等がございましたらお早めに事務局までお知らせ下さい。より完璧な名簿を作るため皆様のご協力をお願い致します。



校正中



編集会議中

編集後記

燦葉会の支部から独立した香葉会も、今年は二十一年目「香葉」の発刊も二〇号を数えることとなりました。第一号は少ない予算の中でのスタートでしたが、回数を重ねる毎に原稿も増え、発行部数も増えてまいりました。二〇号は、一万七千部にもなっております。記念号ということで、ページ数も大巾に増やしました。この機会に、短大を卒業し、日本の地を離れ、海外で生活されている諸先輩方から、原稿を頂きました。各国からのお便りを期待したのですが、アメリカ在住の方からお返事を頂き、大陸の大きさ、考え方の相違等、教えられる点が多々ありました。

皆様はどのように読まれたでしょうか。学長先生はじめ諸先生方、会員の皆様、原稿をお送り下さりご協力頂きましたことを感謝いたします。又、会員の皆様からの、心暖まる賛助金の、御礼を申し上げます。

あすから又、新しい第一歩を踏み出します。香葉会、及び「香葉」が益々、大きく成長するよう、よろしくご支援下さい。



後輩へ就職求人を！

本学卒業生の就職については、卒業生の実績が実を結び、毎年卒業予定者の2～3倍に達する求人があり、各科共百パーセントに近い成績をあげています。しかし、地方出身者に関しては、短大卒業生を受け入れる職場が少ないのです。そこで、高校卒業生に比較し、対人応待等に優れ、即、戦力化し易い短大卒業生、皆様の後輩採用を、皆様及び皆様のご主人に是非、ご検討いただきたいのです。

短大生ご採用のお話しがございましたら、下記就職課迄、ご連絡いただけますように、お願い申し上げます。

〒236 横浜市金沢区六浦町4834 Tel (045) 787-7868～9

関東学院女子短期大学就職課

香葉 第20号

平成3年9月25日 印刷・発行
関東学院同窓会・香葉会
代表者 古城 房子
横浜市金沢区六浦町4834 郵便番号236
関東学院女子短期大学内
電話《045》787-7859

関東学院同窓会・香葉会誌